

こくごりよく きた ぶんしょうにゅうりょくれんしゅう
 国語力を鍛える文章入力練習

レベル		練習内容	作者	実文字数	ページ
レベル1 標準文字数 70~130	1	声高(こえたか)らかに(1)	長谷川 由夫	83	1
	2	声高(こえたか)らかに(2)	長谷川 由夫	71	1
	3	西洋の格言	西洋の格言	79	2
	4	秋	文部省唱歌	79	2
	5	五十音(1)	北原 白秋	97	3
	6	五十音(2)	北原 白秋	110	3
	7	五十音(3)	北原 白秋	137	3
レベル2 標準文字数 150~200	1	教室はまちがうところだ(1)	蒔田 晋治	183	5
	2	教室はまちがうところだ(2)	蒔田 晋治	206	5
	3	教室はまちがうところだ(3)	蒔田 晋治	180	5
	4	教室はまちがうところだ(4)	蒔田 晋治	179	6
	5	教室はまちがうところだ(5)	蒔田 晋治	157	6
	6	教室はまちがうところだ(6)	蒔田 晋治	160	6
	7	夕やけ雲の下(1)	百田 宗治	173	8
	8	夕やけ雲の下(2)	百田 宗治	151	8
	10	水(1)	大関 松三郎	180	10
	11	水(2)	大関 松三郎	159	10
	12	水(3)	大関 松三郎	129	10
	レベル3 標準文字数 200~280	1	牛(1)	高村 光太郎	224
2		牛(2)	高村 光太郎	222	12
3		牛(3)	高村 光太郎	219	12
4		牛(4)	高村 光太郎	209	13
5		牛(5)	高村 光太郎	218	13
6		牛(6)	高村 光太郎	198	13
7		牛(7)	高村 光太郎	224	14
8		飴だま(1)	新美 南吉	218	17
9		飴だま(2)	新美 南吉	236	17
10		飴だま(3)	新美 南吉	257	18
11		飴だま(4)	新美 南吉	238	18

レベル		練習内容	作者	実文字数	ページ
レベル4 標準文字数 300～360	1	ごん狐(1)	新美 南吉	339	20
	2	ごん狐(2)	新美 南吉	307	20
	3	ごん狐(3)	新美 南吉	334	21
	4	ごん狐(4)	新美 南吉	333	21
	5	ごん狐(5)	新美 南吉	339	22
	6	ごん狐(6)	新美 南吉	306	22
	7	ごん狐(7)	新美 南吉	319	23
	8	ごん狐(8)	新美 南吉	346	23
	9	ごん狐(9)	新美 南吉	336	24
	10	ごん狐(10)	新美 南吉	331	24
	11	ごん狐(11)	新美 南吉	306	25
	12	ごん狐(12)	新美 南吉	314	25
	13	ごん狐(13)	新美 南吉	359	26
	14	ごん狐(14)	新美 南吉	333	26
	15	ごん狐(15)	新美 南吉	305	27
レベル5 標準文字数 400～470	1	蜘蛛の糸(1)	芥川龍之介	409	30
	2	蜘蛛の糸(2)	芥川龍之介	405	30
	3	蜘蛛の糸(3)	芥川龍之介	453	31
	4	蜘蛛の糸(4)	芥川龍之介	472	32
	5	蜘蛛の糸(5)	芥川龍之介	421	33
	6	蜘蛛の糸(6)	芥川龍之介	363	34
	7	蜘蛛の糸(7)	芥川龍之介	392	35
レベル6 標準文字数 500～560	1	眠い町(1)	小川 未明	525	41
	2	眠い町(2)	小川 未明	531	42
	3	眠い町(3)	小川 未明	518	43
	4	眠い町(4)	小川 未明	524	44
	5	眠い町(5)	小川 未明	531	45
	6	眠い町(6)	小川 未明	429	46
	7	眠い町(7)	小川 未明	508	47

レベル		練習内容	作者	実文字数	ページ
レベル7 標準文字数 600~650	1	注文の多い料理店(1)	宮沢 賢治	610	50
	2	注文の多い料理店(2)	宮沢 賢治	635	51
	3	注文の多い料理店(3)	宮沢 賢治	646	52
	4	注文の多い料理店(4)	宮沢 賢治	624	53
	5	注文の多い料理店(5)	宮沢 賢治	610	54
	6	注文の多い料理店(6)	宮沢 賢治	644	55
	7	注文の多い料理店(7)	宮沢 賢治	623	56
	8	注文の多い料理店(8)	宮沢 賢治	603	57
	9	注文の多い料理店(9)	宮沢 賢治	638	58
レベル8 標準文字数 800~860	1	走れメロス(1)	太宰 治	869	62
	2	走れメロス(2)	太宰 治	828	63
	3	走れメロス(3)	太宰 治	822	64
	4	走れメロス(4)	太宰 治	851	65
	5	走れメロス(5)	太宰 治	846	66
	6	走れメロス(6)	太宰 治	842	67
	7	走れメロス(7)	太宰 治	830	68
	8	走れメロス(8)	太宰 治	855	69
	9	走れメロス(9)	太宰 治	827	70
	10	走れメロス(10)	太宰 治	824	71
	11	走れメロス(11)	太宰 治	790	72
	12	走れメロス(12)	太宰 治	813	73

レベル1 - 1 こえたか
声高らかに (1)

はせがわ みちお
長谷川 由夫

し ぶん こころ たから
よい詩や文は、心の宝ものです。

なぐさめ、はげましてくれる、こころのふるさとです。

し ぶん たから
よい詩や文は、ことばの宝ものです。

こころ じぶん ひょうげん
心にきざんだ、リズムが、自分の表現をうみます。

レベル1 - 2 こえたか
声高らかに (2)

はせがわ みちお
長谷川 由夫

し ぶん じんせい たから
よい詩や文は、人生の宝ものです。

じぶん ほし らしんばん
自分の星をめざして、いきていく、羅針盤です。

し ぶん
よい詩や文を、おぼえましょう。

こえたか
声高らかに、よみあげましょう。

レベル1 - 3 せいよう かくげん
西洋の格言

か か ちから
変えることができるものを、変えるだけの力を、

か う い ゆうき
変えることのできないものを、受け入れるだけの勇気を、

みわ ちえ あた
そして、そのちがいを、見分けるだけの智慧を、与えたまえ。

レベル1 - 4 あき もんぶしょうしょうか
秋 文部省唱歌

チンチ口まつむしむしのこえ にわのはたけでなきました

ぎんぎらはのつゆくさのつゆ つき 月のひかりにぬれました

とろともえる火いろりの火 ひ ひ くりがはぜますにおいます

レベル1 - 5

ごじゅうおん
五十音 (1)

きたはら はくしゅう
北原 白秋

あめんぼ^{あか}赤いな ア、イ、ウ、エ、オ。

う^もも^ここに小えびもおよいでる。

かき^き木の木、くり^きの木の木、カ、キ、ク、ケ、コ。

き^{つつ}き^き啄木鳥^{こつこつ} 枯れ^かけやき

き^ささ^げに^す酸をかけ サ、シ、ス、セ、ソ。

その^{さかな}魚^{あさせ}浅瀬でさしました。

レベル1 - 6

ごじゅうおん
五十音 (2)

きたはら はくしゅう
北原 白秋

た^た立ちましょ、ラツパで、タ、チ、ツ、テ、ト。

ト^とト^とト^とタツタと飛び^とたつた。

なめくじの^ろろ、ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ。

なん^どど^ど納戸^にぬめ^てて、なにねばる。

はと^ぽっ^ぽ、ほろ^ほろ、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。

日^ひなたのお^へやに^や、^{ふえ}笛^をふく。

レベル1 - 7

五十音 (3)

北原 白秋

まいまい、ね^じま^き、マ、ミ、ム、メ、モ。

う^めの実^み落^おちても見^みもしまい。

や^や焼^きぐり、ゆ^でぐり、ヤ、イ、ユ、エ、ヨ。

や^まだ^だ山^や田^だに^ひ燈^のつ^く宵^の家^の。

らい^ちょう^{さむ}雷^は寒^かろ、ラ、リ、ル、レ、ロ。

れ^んげ^がさ^いたら^る溜^り璃^との^と鳥^り。

わ^いわ^い、わ^っし^よい、ワ、イ、ウ、エ、ヲ。

う^えき^や植^木屋、い^ど井^戸が^え、お^{まつ}祭^りだ。

「五十音」に出てくることばの意味 (_____ の部分)

ことば	ことばの意味
きつつき 啄木鳥	キツツキ目キツツキ科の鳥のうち、アリスイ類以外のものの総称。 指は前向きに2本、後ろ向きに2本で、鋭い爪がある。足と尾羽を用いて木の幹に縦にとまり、強いくちばしで幹に穴をあけ、中の虫を長い舌で引き出して食べる。日本にはアカゲラ・ヤマゲラ・クマゲラなど 10種がいる。
ささげ 大角豆	マメ科の一年草。南アフリカ原産。種子や若い莢を食用にするため栽培する。莢はつる性で、卵形の三小葉からなる複葉を互生。
なんど 納戸	一般的には住宅の中にある物置用の部屋のことをいいます
ぬめる	ぬるぬるしてすべる。なめらかですべる。
よい宵	日が暮れてまだ間もないころ。
るりどり 瑠璃の鳥	ヒタキ科ツグミ亜科の鳥。瑠璃鳥。 全体に紫青色で、白っぽい斑点がある。南アジアに分布。
いどがえ 井戸がえ	井戸水をすっかりくみ出して、中を掃除すること。古くから夏の行事として行われた。井戸さらえ。

レベル 2 - 1

きょうしつ 教室はまちがうところだ (1)

まきた しんじ 蒔田 晋治

きょうしつ 教室はまちがうところだ みんなどしどし て あ 手を上げて
 まちがった 意見 を言おうじゃないか まちがった 答え を言おうじゃないか まちがうこ
 とを おそれちゃいけない まちがったものを ワラっちゃいけない まちがった 意見
 を まちがった 答え を ああじゃないか こうじゃないかと みんなで出しあい 言いあ
 うなかでだ ほんとのものを 見つけていくのだ そうしてみんな で 伸びていくのだ

レベル 2 - 2

きょうしつ 教室はまちがうところだ (2)

まきた しんじ 蒔田 晋治

いつも ただ 正しく まちがいのない こた 答えをしなくちゃならない おも と思って そういうことだと思っ
 ているから まちがうことが こわ くて こわ くて て 手もあげないで ちい 小さくなって だま 黙りこ
じかん くて時間がすぎる せんせい しかたがないから先生だけが か 勝手にしゃべって せいと 生徒はうわ
 のそら それじゃあちっとも の 伸びては行けない かみさま 神様でさえ まちがう世の中 まし
 てこれから にんげん 人間になろうとしているぼくらがまちがったって なにがおかしい あたり
 まえじゃないか

レベル 2 - 3

きょうしつ 教室はまちがうところだ (3)

まきた しんじ 蒔田 晋治

うつむき うつむき て そうっとあげた手 あ はじめて上げた手 て 先生がさした むね どきりと胸
 が おお 大きく鳴って な どつき からだ どつきと体が燃えて も 立ったとたんに忘れてしまった た な
 んだか い ぼそぼそ い しゃべったけれども い なにを言ったか ちんぷんかんぷん 私 わたし はこ
 とりと すわ 座ってしまった からだ 体がすうっと すず 涼しくなって い ああ言やあよかった い こう言や
 あよかった う あとでいいこと う 浮かんでくるのに

それでいいのだ いくども いくども おんなじことを くりかえすうちに それからだん
 だん どきりがやんで ^い言いたいことが ^い言えてくるのだ はじめからうまいこと ^い言え
 るはずないんだ はじめから ^{こた}答えが ^あ当たるはずがないんだ なんどもなんども ^い言
 ってるうちに まちがううちに ^い言いたいことの ^{はんぶん}半分くらいは どうやらこうやら ^い言え
 てくるのだ そうしてたまには ^{こた}答えも ^あ当たる

レベル 2 - 5

きょうしつ
教室はまちがうところだ (5)まきた しんじ
蒔田 晋治

まちがいだらけの ^{ぼく} 僕らの ^{きょうしつ} 教室 おそれちゃいけない ワラっちゃいけない あんしん して
 て手をあげろ ^{あんしん} 安心してまちがえや まちがったってワラったり ばかにしたり おこつた
 り そんなものはおりやあせん まちがったってだれかがよー なおしてくれるし ^{おし} 教え
 てくれる ^{こま} 困ったときには ^{せんせい} 先生が ^{ちえ} ない知恵しぼって ^{おし} 教えるで そんな ^{きょうしつ} 教室作ろうや
 あ

レベル 2 - 6

きょうしつ
教室はまちがうところだ (6)まきた しんじ
蒔田 晋治

おまえへんだと言われたって ^い あんたちがうと言われたって ^{おも} そう思うだからしょうが
 ない だれかがかりにもわらったら まちがうことがなぜわるい まちがってることわ
 かればよー ^{ひと} 人が言おうが ^い 言うまいが ^{じぶん} おらあ自分で ^い あらためる わからなけりや
 あ そのかわり ^い だれが言おうと ^い こづこうと ^{こんじょう} おらあ 根性まげねえだ そんな ^{きょうしつ} 教室
 作ろうやあ

「教室はまちがうところだ」に出てくることばの意味（_____の部分）

ことば	ことばの意味
いげん 意見	ある問題に対する主張・考え。心に思うところ。
こた 答え	相手からかけられた言葉に対して返事をする。 質問や問題に対して解答を出す。
だま 黙りこくる	いつまでもじっと黙っている。口を閉じたまま話そうとしない。
あんしん 安心	気にかかることなく心が落ち着いていること。また、そのさま。
こんじょう 根性	生まれつきの性質。根本的な考え方。苦しさに耐えて成し遂げようとする強い精神力。

レベル 2 - 7 夕やけ雲の下 (1)

ももた 百田
そうじ 宗治

遠い夕やけの空を見ていると、僕はあの雲の下に美しい国があるとおもう。心のきれいな人ばかり住んでいて、いつもたのしい音楽がきこえてくるような気がする。僕はあの遠い国に行きたいなとおもう。

そこには白い塔や、広場があって塔の上にはいつもきらきらと黄色いろのひがかがやき、広場にはぼくたちのような少年少女がいつもいっぱいあそんでいるような気がする。

レベル 2 - 8 夕やけ雲の下 (2)

ももた 百田
そうじ 宗治

僕はあの国に行って、よい本を読み、よいことを考え、みんなのやくに立つよいことをしたいとおもう。あの国にもきっとぼくたちのような少年がいるだろう。遠い夕やけの雲を見ていると、僕はあの下に美しい国があるとおもう。美しい音楽と夕餉があるとおもう。そこへ行けないのがなにかかなしい気もちがしてくる。

「夕やけ雲の下」に出てくることばの意味 (_____ の部分)

ことば	ことばの意味
くに 国	おも こっか どくりつこく い み 主に国家(独立国)を意味するが、さまざまな大きさとおお どくりつせい そな ち い き あらわ たぎてき ことば 表す多義的な言葉である。
こころ 心	め み 目に見えるものではなくふだん なに はな かんが 働いている脳のはたらきです。
ゆうげ 夕餉	ゆうがた しょくじ ゆうしょく ゆうはん 夕方の食事。夕食。夕飯。

夕やけ雲の下見本

レベル2-9 ^{みず}水(1)

^{おおぜき}大関 ^{まつさぶろう}松三郎

^{おお}大きなやかんを ^{そら}空のまんなかまでもちあげて とつくん とつくん ^{みず}水をのむ とつく
ん とつくん とつくん とつくん のどがなって によろ によろ によろ つめたい水が
のどから むねから いぶくろへはいる とつくん とつくん とつくん によろ によろ
によろ ^{いき}息をとめて やかんにすいつく ^{じどうしゃ}自動車みたいに ^{みず}水をつぎこんでいる のん
だ水は ^{みず}すぐまた あせになって

レベル2-10 ^{みず}水(2)

^{おおぜき}大関 ^{まつさぶろう}松三郎

からだじゅうから ぷちっとふきでてる もういっぱい もうひと息 とつくん とつくん
とつくん とつくん どうして こんなに ^{みず}水はうまいもんかなあ ^{みず}こんな水が なんのた
しになるもんかしらんが ^{みず}水をのんだら やっと こしが しゃんとした ああ^{そら}空も た
んぼも すみから すみまで まっさおだ おひさまは たんぼのまんなか

レベル2-11 ^{みず}水(3)

^{おおぜき}大関 ^{まつさぶろう}松三郎

^{しろ ひかり}白い光を ^{ひか}ぶちまけたように ^{ひか}光っている ^{とお}遠いたんぼでは しろかきの馬が ^{うま}ばし
や ^{みず ひかり}ばしやと ^{みず}水の ^{ひかり}光をけちらかしている ^{なえ}うえたばかりの ^{なえ}苗の ^{あたま}頭が ^{かぜ}風に ^ふ吹かれて
もう ^{むら}うれしがって ^{むら}のびはじめてるようだ さっき とんでいったかっこうが ^{むら}村の あ
の ^き木で ^な鳴きはじめた

「水」に出てくることばの意味 (____の部分)

ことば	ことばの意味
やかん	湯わかし具の一種。土瓶、鉄瓶と同じように注口と鉉をもった容器で、特に銅、黄銅、アルマイトなどで作ったものをいい、湯のわきが早いことが特徴。
なんのたしになるもんかしらんが	どんな価値や意味があるかわからないけれど。
しろかきの馬	今では、機械を使っているが、昔は牛や馬を使って、田起こしした田んぼに水を張って、土を細かく砕き、丁寧に掻き混ぜて、田んぼの表面を平らする、これが代掻き作業。

レベル3-1

うし
牛(1)

たかむら こうたろう
高村 光太郎

牛はのろのろと歩く 牛は野でも山でも道でも川でも 自分のいきたいところへは ますますいづく 牛はただでは飛ばない、ただではおどらない がちりがちりと 牛は砂を掘り土を掘り 石をはねとばし やっぱり牛はのろのろ歩く 牛は急ぐことをしない 牛は力いっぱい 地面を頼っていく 自分をのせている自然の力をしんじきっていく ひと足 ひと足 牛は自分の道を味わっていく ふみだす足は必然だ うわの空のことではない 是でも非でも 出さないではたまらない足を出す

レベル3-2

うし
牛(2)

たかむら こうたろう
高村 光太郎

牛だ 出したがさいご 牛はあとへはかえらない 足が地面へめりこんでもかえらない そしてやっぱり牛はのろのろと歩く 牛はがむしゃらではない けれどもかなりがむしゃらだ じゃまなものは二本の角にひっかける 牛は非道をしない 牛はただしいことをする しぜんにしたいくなるようなことをする 牛は判断しない けれども牛は正直だ 牛はしたくなくなったことに 後悔をしない 牛のしたことは牛の 自信を強くする それでもやっぱり牛はのろのろと歩く どこまでも歩く

レベル3-3

うし
牛(3)

たかむら こうたろう
高村 光太郎

自然を信じきって 自然に身をまかして がちり がちりと自然につっこみ食いこんでおくても 先になっても 自分の道を自分でいく 雲にもものらない 雨をも呼ばない 水の上をも泳がない かたい大地にひづめをつけて 牛は平凡な大地をいく やくざな架空の地面にだまされない ひとをうらやましいとも思わない 牛は自分の孤独をちゃんと知っている 牛は食べた物をまた食べながら じっとさびしさを踏んごたえ さらに深く さらに大きい孤独の中 にはいっていく

レベル3 - 4 牛 (4)

高村 光太郎

牛はもうと鳴いて そのとき自然によびかける 自然はやっぱりもうとこたえる 牛は
それにあやさせる そしてやっぱり牛はのろのろと歩く 牛はばかに大まかに、かな
り不器用だ 思いあたってもやるまでがたいへんだ やりはじめてもきびきびとはい
かない けれども牛はばかに敏感だ 三里さきのけだものの声をききわける 最善
最美を直覚する 未来をあきらかに予感する 見よ 牛の目は英知にかがやく そ
の目は自然の形と魂とをいっしょに見ぬく

レベル3 - 5 牛 (5)

高村 光太郎

形のおもちゃを喜ばない 魂の影に魅せられない うるおいのあるやさしい牛の
目 まつ毛の長い黒目がちの牛の目 永遠を日常によび生かす牛の目 牛の目は
聖者の目だ 牛は自然をそのとおりにじっと見る 見つめる きよろきよるときよろつか
ない 目にかどももたない 牛が自然を見ることは牛が自分を見ることだ 外を見る
といっしょに内が見え 内を見るとき外が見える これは牛にとっての努力じ
ゃない 牛にとっての当然だ
そしてやっぱり牛はのろのろと歩く

レベル3 - 6 牛 (6)

高村 光太郎

牛はずいぶん強情だ けれどもむやみとあらそわない あらそわなければならない
ときしか あらそわない ふだんはすべてをただ聞いている そして自分の仕事をし
ている 生命をくだいて力を出す 牛の力は強い しかし牛の潜力だ バネではな
い ねじだ 坂に車を引きあげるねじの力だ 牛がじゃま者をつっかけてはねとば
すときは きりはなれのいい手ぎわだが 牛の力はねばりっこい 邪悪な闘牛士の
卑劣な刃にかかるときでも

じゅっぽんにじゅっぽん
 十本二十本のやりを総身に立てられて よろけながらも つっかける つっかける
 うし ちから ひ そう うし ちから い だい
 牛の力はこうも悲壯だ 牛の力はこうも偉大だ それでもやっぱり牛はのろのろと
 ある ある ある ある ぐさ く だい ち
 歩く どこまでも歩く 歩きながら草を食う 大地からはえている草を食う そして大き
 なからだを肥やす りこうでやさしい目と なつこい舌と かた爪と 厳肅な二本の角
 あい じょう み な ご え きん に く しやう じ き も おお うし うし
 と 愛情に満ちた鳴き声と すばらしい筋肉と 正直なよだれを持った大きな牛 牛
 はのろのろと 歩く 牛は大地をふみしめて歩く 牛は平凡な大地を歩く

「牛」にでてくることばの意味 (_____ の部分)

ことば	ことばの意味
ひつぜん 必然	かなら 必ずそうなること。
うわのそら 空	ほか こと ころ うば 他の事に心が奪われて、そのことにちゅういむが向かないこと。
ぜでもひ 是でも非でも	ぜんあく なにがなんでも。善悪にかかわらず。
がむしやら	ひと もくてき む いきお こ む み 一つの目的に向かって、勢い込んで向こう見ずにする事。
ひどう 非道	ひとひと かつた いき かつた 人としてのあり方や生き方にはずれていること。
こうかい 後悔	じぶん 自分のしてしまったことを、あとになってしっばい 失敗であったとくやむこと
じしん 自信	じぶん じぶん のうりよく かつち 自分で自分の能力や価値などを信じる事。
へいぼん 平凡	とくしよく これといったすぐれた特色もなく、ごくあたりまえなこと。
やくざ	やく た かつち 役に立たないものや価値のないもの。
かくう 架空	こんきよ じじつ もと そうぞう 根拠のないこと。事実に基づかず、想像によってつくりあげること。
こどく 孤独	なかま みよ おも かつた ころ かよ あ 仲間や身寄りがなく、ひとりぼっちであること。思うことを語ったり、心を通い合わせ たりする人が一人もなく寂しいこと。
おお 大まか	こま ものごと す ちみつ 細かいことにこだわらずに物事を済ませるさま。また緻密でないさま。おおざっぱ。
ぶきよう 不器用	てさき きよう 手先が器用でないこと。また、そのさま。
びんかん 敏感	かんかく かんど すろど 感覚や感度の鋭いこと。
さんり 三里	いちり やく きろめーとる やく きろめーとる 一里は約4 k m なので約12 k m 。
さいぜんさいび 最善最美	うつく いちばんよいこと。そしてもっとも美しいこと。

ちよつかく
直覚
みらい
未来

すいり こうさつ しゅんかんでき ものごと ほんしつ ちよつかん
推理や考察によらずに瞬間的に物事の本質をさとること。直観。
げんざい くとき くとき しょうらい
現在のあとに来る時。これから来る時。将来。

よかん
予感

なに こと お こり そうだ と まえ かん
何か事が起こりそうだと前もって感じること。

えいち
英知

すぐれた ち え
すぐれた知恵。

たましい
魂

こころ せいしん
こころ。精神。

せいじゃ
聖者

ぼんのう き ただ ち え え ひと
煩惱をぬぐい去り、正しい智慧を得た人。

ごうじょう
強情

い じ は じぶん かんが かんが かわ
意地を張って、なかなか自分の考えを変えないこと。

せんりよく
潜力

せんざいのうりよく かく ちから のうりよく
潜在能力。隠れた力、能力。

じゃあく
邪悪

こころ ま わる
心がねじ曲がって悪いこと。

とうぎゅうし
闘牛士

うし ひと
牛とたたかう人。トreadル

ひれつ
卑劣

ひんせい げんどう
品性や言動がいやしいこと。

そうみ
総身

からだ ぜんたい ぜんしん
からだ全体、全身。

ひそう
悲壮

かな なか お お
悲しい中にも雄々しくりっぱなところがあること。

げんしゆく
厳粛

おごそかで ころ ひ し
おごそかで、心が引き締まるさま。

レベル3－8

あめ
飴だま（1）にいみ なんきち
新美 南吉

はる 春のあたたかいひのこと、わたしふねふたりちいここの小さな子どもをつれたおんなたびびとおんな たびびとの女の旅人がのり
ました。ふねふねがででようとうとすると、「おおい、ちょっとまってくれ。」とどてのむこうからてて
ふりながら、さむらいさむらいひとりはしひとりはしふねふねとびこみました。ふねふねは出ました。さむらいさむらいふねふねの
まなかなかにどっかりすわっていました。ぽかぽかあたたかいので、そのうちにいねむり
をはじめました。くろくろいひげをはやして、つよそうなさむらいさむらいが、こっくりこっくりするので、
ここどもたちはおかしくて、ふふふとわらいました。

レベル3－9

あめ
飴だま（2）にいみ なんきち
新美 南吉

かあかあくちくちゆびゆび
お母さんは口に指をあてて、「だまっておいで。」といました。
さむらいさむらい
侍がおこってはたいへんだからです。子どもたちはだまりました。
ひとりひとりここの子どもが、かアちゃん、あめあめだまだまちょうだい。と手をさしだしまして
た。すると、もう一人の子どもも、かアちゃん、あたしにも。といました。かあかあ
はふところからかみかみのふくろをとりだしました。ところが、あめあめだまだまはもうひとつひとつしかありま
せんでした。「あたしにちょうだい。」「あたしにちょうだい。」二人の子どもは、両方りょうほう
らせがみしました。

レベル3－10

あめ
飴だま（3）にいみ なんきち
新美 南吉

あめあめひとひと
飴だまは一つしかないので、お母さんはこまってしまいました。
ここ
「いい子たちだからまっておいで、むこうへついたら買ってあげるからね。」と行ってき
かせても、ここどもたちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。いね
むりをしていたはずのさむらいさむらいめめは、ぱっちり目をあけて、子どもたちがせがむせがむのを見てい
ました。
かあかあ
お母さんはおどろきました。いねむりをじゃまされたので、このお侍さむらいはおこっている
のにちがいない、おもおもい思いました。「おとなしくしておいで」とお母さんかあはここどもたちをな
だめなだめました。けれどここどもたちはききませんでした。

すると侍^{さむらい}が、すらりと刀^{かたな}をぬいて、お母^{かあ}さんと子ども^こたちのまえにやってきました。お母^{かあ}さんはまっさおになって、子ども^こたちをかばいました。いねむりのじゃまをした子ども^こたちを、侍^{さむらい}が切り^きころす^{おも}と思ったのです。「飴^{あめ}だまをだせ。」と侍^{さむらい}はいいました。

お母^{かあ}さんはおそるおそる飴^{あめ}だまをさ^{さむらい}だしました。侍^{さむらい}はそれを舟^{ふね}のへりに^{かたな}のせ、刀^{かたな}でぱちんと二つ^{ふた}にわりました。そして、「そ^{ふたり}おれ。」と二人^{ふたり}の子ども^こに^わ分けてやりました。それから、またもとのところ^{ところ}にかえって、こっくりこっくりねむりはじめました。

「飴だま」に出てくることばの意味 (_____ の部分)

ことば	ことばの意味
どて	ふうすいがい ふせ かわぎし つち つ あ きず つつみ 風水害を防ぐために、川岸に土を積み上げて築いた堤。
ふところ	いふく き たの わね うちがわ ぶぶん 衣服を着たときの、胸のあたりの内側の部分。
せがむ	むり たの 無理に頼む。しつこくねだる
だだをこねる	こ おや い こま じぶん おも どの い 子どもが親にわがママを言って困らせたり、自分の思い通りに行かないことで癇癪を起したりすること。
なだめる	いか ふまん きもち おだ 怒りや不満をやわらげて気持ちを穏やかにする。
ふねのへり	ふね きゆう ふなばた 舟の左右のふち。船端。

レベル4-1

ぎつね
ごん狐(1)にいみ なんきち
新美 南吉

これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です。むかしは、私たちの村のちかくの、中山というところに小さなお城があって、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」という狐がいました。ごんは、一人ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとって、いったり、いろんなことをしました。或秋のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間、ごんは、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

レベル4-2

ぎつね
ごん狐(2)にいみ なんきち
新美 南吉

雨があがると、ごんは、ほっとして穴からはい出ました。空はからっと晴れていて、百舌鳥の声がきんきん、ひびいていました。ごんは、村の小川の堤まで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少いのですが、三日もの雨で、水が、どっとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩の株が、黄いろくにごった水に横だおしになって、もまれていきます。ごんは川下の方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうと草の深いところへ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。

「兵十だ」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという網をゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょに、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子みたいにへばりついていました。しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになったところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれなどが、ごちゃごちゃはいつていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しょにぶちこみました。そして、また、袋の口をしばって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもって川からあがりびくを土手においといて、何をさがしにか、川上の方へかけていきました。兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手の川の中を目がけて、ぽんぽんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごった水の中へもぐりこみました。一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれなくなった、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュッと行ってごんの首へまきつきました。

そのとたんに兵十が、向うから、「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びっくりしてとびあがりました。うなぎをふりすててにげようとしたのですが、うなぎは、ごんの首にまきついたまはなれません。ごんはそのまま横とびにとび出して一しようけんめいに、にげていきました。ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえって見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずして穴のそとの、草の葉の上の上にのせておきました。十日ほどたって、ごんが、弥助というお百姓の家の裏を通りかかりますと、その、いちじくの木のかげで、弥助の家内が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋の新兵衛の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。

ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。「何だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰に手拭をさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋の中では、何かぐずぐず煮えていました。「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。「兵十の家のだれが死んだんだろう」お午がすぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六地藏さんのかげにかくれていました。

いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦が光っています。墓地には、ひがん花が、赤い布のようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘が鳴って来ました。葬式の出る合図です。やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声も近くなりました。葬列は墓地へは行って来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。ごんはのびあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌をささげています。いつもは、赤いさつま芋みたいな元気の良い顔が、きょうは何だかしおれていました。「ははん、死んだのは兵十のおっ母だ」ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。「兵十のおっ母は、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おっ母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままおっ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだらう。ちよっ、あんないたずらをしなけりやよかった。」兵十が、赤い井戸のところで、麦をといでいました。兵十は今まで、おっ母と二人きりで、貧しいくらしをしていたもので、おっ母が死んでしまっちは、もう一人ぼっちでした。「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」こちらの物置の後から見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置ものおきのそばをはなれて、向うむこへいきかけますと、どこかで、いわしうを売る声こえが
 します。「いわしのやすうりだアい。いきのいいいわしだアい」ごんは、その、いせい
 のいい声こえのする方ほうへ走はしっていきました。と、弥助やすけのおかみさんが、裏戸口うらとぐちから、「い
 わしをおくれ。」とい言いいました。いわしうり売いは、いわしのかごをつんだ車くるまを、道みちばたにお
 いて、ぴかぴか光ひかるいわしを両手りょうてでつかんで、弥助やすけの家いえの中なかへもってはいりました。
 ごんはそのすきまに、かごの中なかから、五ご、六ろっぴきのいわしをつかみ出だして、もと来た
 方ほうへかけだしました。そして、兵十ひょうじゅうの家いえの裏口うらぐちから、家いえの中なかへいわしを投なげこんで、
 穴あなへ向むかってかけもどりました。途中とちゅうの坂さかの上うえでふりかえって見みますと、兵十ひょうじゅうがまだ、
 井戸いどのところで麦むぎをといでいるのが小ちいさく見みえました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。つぎの日ひには、
 ごんは山やまで栗くりをどっさりひろって、それをかかえて、兵十ひょうじゅうの家いえへいきました。裏口うらぐち
 からのぞいて見みますと、兵十ひょうじゅうは、午飯ひるめしをたべかけて、茶椀ちやわんをもったまま、ぼんやり
 と考かんがえこんでいました。へんなことには兵十ひょうじゅうの頬ほっぺたに、かすり傷きずがついていま
 す。どうしたんだろうと、ごんおもが思おもっていますと、兵十ひょうじゅうがひとりごとをいいました。
 「一いったいだれが、いわしうちなんかをおれの家うちへほうりこんでいったんだろう。おかげで
 おれは、盗人ぬすびとと思おもわれて、いわし屋やのやつに、ひどい目めにあわされた」と、ぶつぶつ
 言いっています。ごんは、これはしまったと思おもいました。かわいそうに兵十ひょうじゅうは、いわし
 屋やにぶんきずなぐられて、あんな傷きずまでつけられたのか。

レベル4-11

ぎつね
ごん狐 (11)にいみ なんきち
新美 南吉

ごんはこうおもいながら、そつと物置の方へまわってその入口に、栗をおいてかえり
 ました。つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって
 来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもって
 きました。月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまの
 お城の下を通過してすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞
 えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。ごんは、道の片がわに
 かくれて、じっとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と
 加助というお百姓でした。「そうそう、なあ加助」と、兵十がいました。

レベル4-12

ぎつね
ごん狐 (12)にいみ なんきち
新美 南吉

「ああん？」「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」
 「何が？」「おっ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗やまつたけなんか
 を、まいにちまいにちくれるんだよ」「ふうん、だれが？」「それがわからんのだよ。お
 れの知らんうちに、おいていくんだ」ごんは、ふたりのあとをつけていきました。「ほん
 とかい？」
 「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ」「へえ、
 へんなこともあるもんだなア」それなり、二人はだまって歩いていきました。加助がひ
 よいと、後を見ました。ごんはびくっとして、小さくなってたちどまりました。加助は、
 ごんには気がつかないで、そのままさっさとあるきました。

吉兵衛きちべえというお百姓ひやくしやうの家いえまで来ると、二人ふたりとはそこへは行っていきました。ポンポン
ポンポンと木魚もくぎよの音おとがしています。窓まどの障子しょうじにあかりがさして、大きな坊主頭おおぼうずあたま
がうつって動うごいていました。ごんは、「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸いどの
そばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人さんにんほど、人がつれだひとって吉兵衛きちべえ
の家いえへは行っていきました。お経きやうを読む声よこえがきこえて来きました。

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸いどのそばにしゃがんでいました。兵十ひやうじゆうと加助かすけは、
また一しよにかえっていきます。ごんは、二人ふたりの話はなしをきこうと思って、ついていきま
した。兵十ひやうじゆうの影法師かげほうしをふみふみいきました。

お城しろの前まえまで来たとき、加助かすけが言い出いしました。

「さっきの話はなしは、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十ひやうじゆうはびっくりして、加助かすけの顔かおを見みました。

「おれは、あれからずっと考かんがえていたが、どうも、そりゃ、人間にんげんじゃない、神さまだ、
神さまが、お前かみがたった一人ひとりになったのをあわれに思おもわっしゃって、いろんなものを
めぐんで下さるんだよ」「そうかなあ」

「そうだとも。だから、まいにち神さまにお礼かみを言う方がいいよ」「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思おもいました。おれが、栗くりや松まつたけを持もって
行ってやるのに、そのおれにはお礼れいをいわないで、神さまにお礼かみをいうんじゃア、お
れは、引ひき合あわないなあ。

そのあくる日ひもごんは、栗くりをもつて、兵十ひやうじゆうの家いえへ出でかけました。兵十ひやうじゆうは物置ものおきで
縄なわをなっていました。それでごんは家の裏口いえうらぐちから、こっそり中なかへはいりました。

そのとき兵十ひやうじゆうは、ふと顔かおをあげました。と狐ぎつねが家いえの中なかへはいったではありませ
んか。

こないだうなぎをぬすみやがったあのごんぎつね狐きめが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十ひょうじゅう たは立ちあがって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゅうをとって、火薬かやくをつめました。

そして足音あしおとをしのばせてちかよって、今戸口いまとぐちを出ようとするごんを、ドンと、うちまし

た。ごんは、ばたりとたおれました。兵十ひょうじゅうはかけよって来ました。家いえの中なかを見ると、
土間どまに栗くりが、かためておいてあるのが目めにつきました。

「おや」と兵十ひょうじゅうは、びっくりしてごんに目めを落おとしました。

「ごん、お前まえだったのか。いつも栗くりをくれたのは」

ごんは、ぐったりと目めをつぶったまま、うなずきました。

兵十ひょうじゅう ひなわじゅうは火縄銃おとをばたりと、とり落あおしました。青い煙けむりが、まだ筒口つつぐちから細く出ほそてい

ました。

「ごん狐」にでてくることばの意味 (_____ の部分)

ことば	ことばの意味
かわしも 川下	かわ みず なが くだ ほう かわぐち ちか ほう 川の水の流れ下る方。川口に近い方。
はりきり網 あみ	おおあめ ふ あと いけ お かわ かりゅう たらえ あみ 大雨が降った後に池から落ちてくるウナギを川の下流で捕るための網。 ふつう ま あみ かわはば やなべ 普通は待ち網といいますが、川幅いっぱいに“はりきって”使うため、岩滑では“はりきり網”と呼んでいました。(岩滑は新美南吉が育った愛知県半田市にある地域)
びく	つ さかな ほかん い もの あみせい せい 釣った魚を保管しておくための入れ物。網製やカゴ製のものがある。
かわかみ 川上	かわ みず なが ほう かわ みなもと ちか ほう 川の水の流れてくる方。川の源に近い方。
はんの木 き	にほん さんや ていち しつち ぬま じせい じゅこう ちよっけい 日本では山野の低地や湿地、沼に自生する。樹高は15～20m、直径60cmほど。 しつげん かしつち しんりん けいせい かずすく じゅもく 湿原のような過湿地において森林を形成する数少ない樹木。
おはぐろ	めいじじだいいぜん にほん ちゅうごくなんとうぶ とうなん ふうしゅう しゅ きこんじよせい 明治時代以前の日本や中国南東部・東南アジアの風習で主として既婚女性、まれに だんせい はくろ そ けしやうほう 男性などの歯を黒く染める化粧法のこと。
かじや 鍛冶屋	いっぽんてき かじ きんぞく う きた おこな てんぼ しよくにん き しゅ 一般的に鍛冶(金属を打ち鍛えること)を行う店舗もしくはその職人を指す。主として てつせいひん あつか はもの かなづち くわ せいぞうはんばい しゅうり おこな 鉄製品を扱い、刃物、金槌、鋏などの製造販売、修理を行う。
みや お宮	きゅうでん ごてん い み みや ていねい ひょうげん おお ぼあい じんじや き 宮殿・御殿を意味する「宮」に丁寧の「お」をつけた表現で多くの場合、神社を指す。
かみしも	わふく だんしせいそう いっしゅ 和服における男子正装の一種
いはい 位牌	ししゃ ほうみょう かいみょう ぞくめい しぼうねんがっぴ ねんれい き ぶつぐ 死者の法名(戒名)、俗名、死亡年月日、年齢を記した仏具。
ものおき 物置	とうめんひつよう きぐなどをい ばしよ 当面必要としない器具などを入れておく場所。また、そのための小屋。
うらとぐち 裏戸口	いえ うら で い ぐち かつてぐち 家の裏の出入り口。勝手口。
ぬすびと 盗人	たにん もの ぬす ひと とうぞく 他人の物を盗む人。どろぼう。盗賊。ぬすっと。ぬすと。
もくぎよ 木魚	もくぎよ とうきよう う なら ととの 木魚は読経をするときに打ち鳴らすことで、リズムを整える。

また、^{ねむげざ}眠気覚まし^{いみ}の意味もあり、^{もくぎよ}木魚^{さかな}が魚^もを模しているのは、^{ねむ}眠るときも^め目を閉じない^と魚^{さかな}が^{ねむ}かって眠らないものだと^{しん}信じられていたことに由来する。

かげぼうし
影法師

^{ひかめ}光^あが当たって、^{しょうじ}障子^{ちじょう}や地上などに^{うつる}映る^{ひと}人の影。影絵。

なや
納屋

屋外に建てられた物を納めておく小屋。

ひなわじゅう
火縄銃

^{ひなわ}火縄によって^{ほっしややく}発射薬に^{てんか}点火させて^{だんがん}弾丸を^{はっしや}発射する方式の^{ほうしき}小銃^{しょうじゅう}。

^{せいきこうはん}15世紀後半にヨーロッパで^{はつめい}発明され、^{にほん}日本へは^{てんぶん}天文12年(1543)ポルトガル^{ねん}人によつて^{たねがしま}種子島^{でんらい}に伝来した。

つつぐち
筒口

ホースなど^{つつがた}筒形の物の^{もの}先端の^{せんたん}部分。鉄砲の^{ぶぶん}先。銃口^{てつぽう}。銃口^{きき}。銃口^{じゅうこう}。

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。するとその地獄の底に、カンダタと云う男が一人、ほかの罪人と一しょに蠢いている姿が、御眼にとまりました。このカンダタと云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございしますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございします。

と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこでカンダタは早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございします。御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、このカンダタには蜘蛛を助けた事があるのを御思い出になりました。そうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそっと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、遥か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしていただ
 ございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら闇からぼんやり浮き上
 っているものがあると思ひますと、それは恐い針の山の針が光るのでございます
 から、その心細さと云ったらございませぬ。その上あたりは墓の中のようしんと静
 まり返って、たまに聞えるものと云っては、ただ罪人がつく微な嘆息ばかりでござい
 ます。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはて
 て、泣声を出す力さえなくなっているのございませぬ。ですからさすが大泥坊の
 カンダタも、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただ
 もがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございます。何気なくカンダタが頭を挙げて、血の池の空を
 眺めますと、そのひっそりとした闇の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、
 まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上
 へ垂れて参るのにはございませぬか。

カンダタはこれを見^みると、思^{おも}わず手^てを打^うって喜^{よろこ}びました。この糸^{いと}に縫^{すが}りついて、どこまでものぼ^いって行^いけば、き^{じごく}つと地獄^{じごく}からぬ^だけ出^だせるの^のに相違^{そうい}ございません。いや、うま^いく行^いくと、極楽^{ごくらく}へはいる事^{こと}さえも出^で来^きましよう。そうすれば、もう針^{はり}の山^{やま}へ追^おい上げられる事^{こと}もなくなれば、血^ちの池^{いけ}に沈^{しず}められる事^{こと}もある筈^{はず}はございません。

こう思^{おも}いましたからは、早速^{さつそく}その蜘蛛^{くも}の糸^{いと}を両手^{りょうて}でし^しっかりとつか^{つか}みながら、一生^{いっしょうけんめい}懸命^{けんめい}に上^うへ上^うへとたぐ^{たぐ}りのぼ^ぼり始^{はじ}めました。元^{もと}より大泥坊^{おおどろぼう}の事^{こと}でござ^ごいますから、こう云^いう事^{こと}には昔^{むかし}から、慣^なれ切^きっているの^のでござ^ごいます。

しかし地獄^{じごく}と極楽^{ごくらく}との間^{あいだ}は、何^{なん}万^{まん}里^りとなくござ^ごいますから、い^いくら焦^{あせ}って見^みた所^{ところ}で、容^{よう}易^いに上^うへは出^でられませ^せん。や^やしば^らく^くのぼ^ぼる中^{うち}に、と^とう^うカ^カン^ンダ^ダタ^タも^もく^くた^たび^びれて、もう一^{ひと}たぐ^{たぐ}りも上^うの方^{ほう}へはのぼ^ぼれな^なくな^なってしま^{しま}いませ^せん。そ^そこ^こで仕^{しか}方^たがござ^ごいませ^せんから、ま^まず一^{ひと}休^{やす}み休^{やす}むつも^つり^りで、糸^{いと}の中^{ちゆう}途^とにぶ^ぶら^ら下^さりな^なが^がら、遥^{はる}か^かに目^めの下^{した}を^を見^み下^おしま^{した}。

すると、一生^{いっしょうけんめい}懸命^{けんめい}にのぼ^ぼった甲斐^{かい}があ^あって、さ^さき^きま^まで自^じ分^{ぶん}がいた血^ちの池^{いけ}は、今^{いま}ではもう間^{やみ}の底^{そこ}にいつ^{いつ}の間^まにかか^かく^くれ^れて居^おります。

それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。カンダタは両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事の無い声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。カンダタはこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ切れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で切れたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。

そんな事ことがあったら、大変たいへんでございます。が、そう云う中にも、罪人ざいにんたちは何百なにひやくとなく何千なにせんとなく、まっ暗くらな血ちの池いけの底そこから、うようよと這い上って、細ほそく光ひかっている蜘蛛くもの糸いとを、一列いちれつになりながら、せっせとのぼって参まいります。今いまの中うちにどうかしなければ、糸いとはまん中なかから二つふたに切きれて、落おちてしまうちがのに違ちがいありません。

そこでカンダタは大きな声おおこえを出だして、「こら、罪人ざいにんども。この蜘蛛くもの糸いとは己おれのものだぞ。お前まえたちは一体いっただれ誰きに訊きいて、のぼって来おた。下おりろ。下おりろ。」と喚わめきました。

その途端とたんでございませう。今いままで何なんともなかつた蜘蛛くもの糸いとが、急きゆうにカンダタのぶら下さがっている所ところから、ぷつりと音おとを立てて切きれました。ですからカンダタもたまりませう。あつと云いう間まもなく、独楽こまのようみにくるくるまわりながら、見みる見みる中うちに闇やみの底そこへ、まっさかさまに落おちてしまいました。

後あとにはただ極楽ごくらくの蜘蛛くもの糸いとが、きらきらと細ほそく光ひかりながら、月つきも星ほしもない空そらの中途ちゆうとに、短みじかく垂たれているばかりでございませう。

あつと云う間もなく風を切つて、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に闇の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらつしやいましたが、やがてカンダタが血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、カンダタの無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう昼に近くなったのでございましょう。

くも いと いみ
「蜘蛛の」糸にでてくることばの意味 (____の部分)

ことば	ことばの意味
おしゃかさま 御釈迦様	ぶっきょう ひら ひと 仏教を開いた人です。インドの小国に生まれ、80歳で亡くなるまで人々に教を説いてまわったと言われています。 お釈迦様の本当の名前は「釈迦牟尼世尊」あるいは「釈迦牟尼如来」ですが、日本人は親しみを込めて「お釈迦様」と呼びます。
ごくらく 極楽	あんらく なん しんばい ばしょ きょうぐう くる しあわ せかい 安楽で何の心配もない場所や境遇のこと。苦しみのない幸せに満ちた世界であるとされる。天国。反対語は地獄。
はずいけ 蓮池	はず は いけ 蓮の生えている池。
ずい 蕊	しゅしよくぶつ お め 種子植物の、雄しべと雌しべ。
おたす 御侍み	しばらく たち ども しばらく立ち止まっている。じつとその場所にいる。
さんず かわ 三途の河	こは ししや さいしよ おとず ばしょ かんが れい すべ わた ごくらく ここは死者が最初に訪れる場所と考えられており、霊は全てこの川を渡り極楽または地獄へ向かうとされる。渡るための舟に乗るために渡し賃が必要であり、その金額は六文である、とされている。
のぞ めがね 覗き眼鏡	はこ いっぽう とつ と つ たほう え こ かくだい み そうち 箱の一方に凸レンズを取り付け、他方に絵をはめ込んで、拡大して見せる装置。 覗き(からくり)を含めていうこともある。 すいちゆう かいちゆう み そこ は はこ はこ 水中・海中を見られるように、底にガラスを張った箱。箱めがね。
ざいにん 罪人	つみ おか ひと 罪を犯した人。つみびと。
うごめ 蠢く	むし 虫がはうように絶えずもぞもぞ動く。
むやみ 無暗に	そうすべき りゆう もない のに けつが かんが おこな かんが そうすべき理由もないのに結果を考えずに行うこと。あとさきを考えずにするこ と。また、そのさま。
ようす 容子	そと み ものごと じょうきよう じょうたい ようす おな 外から見てわかる物事のありさま。状況。状態。様子と同じ。
むく 報い	こうい けつが み かえ ことがら げんざい わる こうい けつが ある行為の結果として身にはね返ってくる事柄。現在では悪い行為の結果につ いていうことが多い。
ひすい 翡翠	しんりよく ほんとうめい ほうせき 深緑の半透明な宝石のひとつ。

こころほそ
心細い

たよ
頼るものがなく不安である。

たんそく
嘆息

かな
悲しんだりがっかりしたりして、ためいき息をつくこと。

せめく
責苦

せいせいんてき にくたいてき せ
精神的、肉体的に責めさいなまれる苦しき。

むせ
咽び

こみあげる感情で息が詰まる。また、息を詰まらせながら泣く。

てんじょう
天上

そら うえ そら
空の上。空。

た
垂れる

ひとつづきのものの端が下の方へ低く、力なく下がる。水などが何かをつたって少しずつ落ちる。

すが
継る

たよ
頼りとするものにつかまる。助力を求めて頼りとする。

そうい
相違

ふた
二つのもの間にちがいがあること。ここでは「相違ございません」なので「まちがいが無い。確実である」ということになります。

たぐる

りょうて かわ がわ ひ てもと ひ よ
両手で代わる代わる引いて手元へ引き寄せる。

なんまんり
何万里

ひじょうに長く遠い。

ようい
容易

たやすいこと。やさしいこと。ここでは「容易に上に出られません」なので「上に出るのはたやすいことではない」ということになります。

はる
遥かに

きょり とおく へだ
距離が遠く隔たっているさま。

かい
甲斐があつて

やっしたことや、やってきたことの効果。

ぞんがい
存外

ものごと ていど よそう こと
物事の程度などが予想と異なること

かずかぎ
数限りない

かぞ
数えられないほど多い。

いっしん
一心に

ほかのことを考えずに心を一つに集中させるさま。

ぼか
莫迦

おろ
愚かなこと。

こら
堪える

た
耐える。こらえる。がまんする。もちこたえる。

かんじん
肝腎

とく たいせつ ひじょう じゅうよう
特に大切なこと。非常に重要なこと。

うようよ

ひと おおぜいあつ
人などが大勢集まっているさま。うじゃうじゃ。

は あ
這い上がる

ざつしゅつ
脱出する。

わめ
喚く

さけぶ。どなる。

とたん
途端

あることが行われた、その瞬間。そのすぐあと。

かぜ き
風を切る

いきお すす いきよ かいてん
勢いよく進む。また、勢いよく回転する。

こ ま
独楽

じく ちゅうしん かいてん がんぐ
軸を中心に回転させる玩具。

いちぶしじゅう
一部始終

ものごと はじ お
物事の初めから終わりまで。

む じ ひ
無慈悲

おも ころ ころ
思いやりの心がないこと。あわれみの心がないこと。また、そのさま。

とんちやく
頓着

ふか き
深く気にかけてこだわること。

うたな
萼

はな もつと そとがわ しゅう きかん すうこ がくへん な おお みどりいろ
花の最も外側に生じる器官。数個の萼片から成り、多くは緑色。

たえま
絶間なく

ものごと ちゅうだん とだ つづ やす
物事が中断することがない。途絶えることなく続くさま。休みない。

ようす
容子

そと み ものごと じょうきょう じょうたい ようす おな
外から見てわかる物事のありさま。状況。状態。様子と同じ。

むく
報い

ある行為の結果として身にはね返ってくる事柄。現在では悪い行為の結果につ
いていうことが多い。

ひすい
翡翠

しんりよく ほんとうめい ほうせき
深緑の半透明な宝石のひとつ。

こころほそ
心細い

たよ ふあん
頼るものがなく不安である。

たんそく
嘆息

かな いき
悲しんだりがつかりしたりして、ためいき息をつくこと。

せめく
責苦

せいせいんてき にくたいてき せ くる
精神的、肉体的に責めさいなまれる苦しみ。

むせ
咽び

こみ上げる感情で息が詰まる。また、息を詰まらせながら泣く。

てんじょう
天上

そら うえ そら
空の上。空。

た
垂れる

ひとつづきのものの端が下の方へ低く、力なく下がる。水などが何かをつたって少
しずつ落ちる。

すが
縋る

たよ じよりよく もと たよ
頼りとするものにつかまる。助力を求めて頼りとする。

そうい
相違

ふた あいだ そうい
二つのもの間 にちがいがあること。ここでは「相違ございません」なので「ま
ちがいがない。确实である」ということになります。

たぐる

りょうて かわ がわ ひ てもと ひ よ
両手で代わる代わる引いて手元へ引き寄せる。

なんまんり
何万里

なが とお
ひじょうに長く遠い。

ようい
容易

たやすいこと。やさしいこと。ここでは「容易に上に出られません」
なので「上に出るのはたやすいことではない」ということになります。

はる
遥かに

きより とおく へだ
距離が遠く隔たっているさま。

かい
甲斐があつて

やったことや、やってきたことの効果。

ぞんがい
存外

ものごと ていど よそう こと
物事の程度などが予想と異なること

かずかぎ
数限りない

かず おお
数えられないほど多い。

いっしん
一心に

ほかのことを かんが えずに ころ ひと しゅうちゅう
ほかのことを考えずに心を一つに集中させるさま。

ぼか
莫迦

おろ
愚かなこと。

こら
堪える

た
耐える。こらえる。がまんする。もちこたえる。

かんじん
肝腎

とく たいせつ ひじょう じゅうよう
特に大切なこと。非常に重要なこと。

うようよ

ひと おおぜいあつ
人などが大勢集まっているさま。うじゃうじゃ。

はあ
這い上がる

ざっしゅつ
脱出する。

わめ
喚く

さけぶ。どなる。

とたん
途端

あることが行われた、その瞬間。そのすぐあと。

かぜ き
風を切る

いきお すす いきよ かいてん
勢いよく進む。また、勢いよく回転する。

こま
独楽

じく ちゅうしん かいてん がんぐ
軸を中心に回転させる玩具。

いちぶしじゅう
一部始終

ものごと はじ お
物事の初めから終わりまで。

むじひ
無慈悲

おも ころ
思いやりの心がないこと。あわれみの心がないこと。また、そのさま。

とんちやく
頓着

ふか き
深く気にかけてこだわること。

うてな
萼

はな もつと そとがわ しょう きかん すうこ がくへん な おお みどりいろ
花の最も外側に生じる器官。数個の萼片から成り、多くは緑色。

この少年は、名を知られなかった。私は仮にケーと名づけておきます。

ケーがこの世界を旅行したことがありました。ある日、彼は不思議な町にきました。

この町は「眠い町」という名がついておりました。見ると、なんとなく活気がない。また

音ひとつ聞こえてこない寂然とした町であります。また建物とっては、いずれも古

びていて、壊れたところも修繕するではなく、煙ひとつ上がっているのが見えません。

それは工場などがひとつもないからでありました。

町はだらだらとして、平地の上に横たわっているばかりであります。しかるに、どう

してこの町を「眠い町」というかといいますと、だれでもこの町を通ったものは、

不思議なことには、しぜんと体が疲れてきて眠くなるからでありました。それで日に

幾人ともなくこの町を通る旅人が、みなこの町にきかかると、急に体に疲れを覚えて

眠くなりますので、町はずれの木かげの下や、もしくは町の中にある石の上に腰を

下ろして、しばらく休もうといたしますうちに、まるで深い深い穴の中にでも引き込

まれるように眠くなって、つい知らず知らず眠ってしまいます。

ようやく目がさめた時分には、もういつしか日が暮れかかっているので、驚いて起

ち上がって道を急ぐのでありました。

この話^{はなし}がだれからだれに^{つた}伝わるとなく^{ひろ}広^{たび}が^{ひとびと}って、^{まち}旅^{とお}する人々はこの町^{まち}を通^{とお}ることを
おそれました。そして、わざわざこの町^{まち}を通^{とお}ることを^さ避^{とお}けて、ほかのほう^{とお}を遠^{とお}まわりを
してゆくものもありました。

ケーは、人々^{ひとびと}のおそれるこの「眠い町^{ねむ まち}」が^み見^{ひと}た^{おそろ}かったのです。人の^{まち}恐^{おそろ}ろ^{まち}しが^{まち}る^{まち}町^{まち}へ
い^{おれ}って^{ねむ}みたい^{がまん}もの^{ねむ}だ。俺^{おれ}ばかりは^{ねむ}け^{がまん}って^{ねむ}眠^{ねむ}くな^{ねむ}った^{ねむ}と^{ねむ}て、^{ねむ}我慢^{ねむ}を^{ねむ}して^{ねむ}眠^{ねむ}り^{ねむ}は^{ねむ}し^{ねむ}ない^{ねむ}と
心^{こころ}に^き決^{こうきしん}めて、^{さそ}好^{ねむ}奇^{まち}心^{ほう}の^さ誘^{ある}う^{ある}ま^{ある}ま^{ある}に、^{ある}その「眠い町^{ねむ まち}」の^さ方^さを^{ある}指^{ある}して^{ある}歩^{ある}いて^{ある}き^{ある}ま^{ある}し^{ある}た。

なるほどこの町^{まち}に^{ひとびと}きて^きみると、それは人々^{ひとびと}の^きい^{みる}った^{わる}よ^{まち}う^{まち}に^{まち}気^{まち}味^{まち}の^{まち}悪^{まち}い^{まち}町^{まち}で^{まち}あり^{まち}ま^{まち}し^{まち}た。
音^{おと}ひ^きと^{しん}つ^{ひる}聞^まこ^{よる}える^{よる}で^{よる}は^{よる}な^{よる}く、^{けむり}寂^{けむり}然^{けむり}と^{けむり}して^{けむり}昼^{けむり}間^{けむり}も^{けむり}夜^{けむり}の^{けむり}よ^{けむり}う^{けむり}で^{けむり}あり^{けむり}ま^{けむり}し^{けむり}た。また^{けむり}煙^{けむり}ひ^{けむり}と^{けむり}
つ^あ上^あが^あって^あいる^あで^あは^あな^あく、^あな^あに^あひ^あと^あつ^あ見^ある^あよ^あう^あな^あもの^あは^ああり^あま^あせ^あん。どの^あ家^あも^あ戸^あを^あ閉^あ
め^あき^あっ^あて^あい^あま^あす。まるで^あ町^あ全^あ体^あが^あ、^あち^あょう^あど^あ死^あん^あだ^あもの^あの^あよ^あう^あに^あ静^あか^あで^ああり^あま^あし^あた。

ケーは^{こわ}壊^{こわ}れ^{こわ}か^{こわ}か^{こわ}った^{こわ}黄^{こわ}色^{こわ}な^{こわ}土^{こわ}の^{こわ}へ^{こわ}い^{こわ}につ^{こわ}いて^{こわ}歩^{こわ}いた^{こわ}り、^{こわ}破^{こわ}れ^{こわ}た^{こわ}戸^{こわ}の^{こわ}す^{こわ}き^{こわ}ま^{こわ}か^{こわ}ら^{こわ}中^{こわ}
の^{こわ}よ^{こわ}う^{こわ}す^{こわ}を^{こわ}の^{こわ}ぞ^{こわ}いた^{こわ}り^{こわ}し^{こわ}ま^{こわ}し^{こわ}た。けれど、^{こわ}家^{こわ}の^{こわ}中^{こわ}には^{こわ}人^{こわ}が^{こわ}住^{こわ}ん^{こわ}で^{こわ}い^{こわ}る^{こわ}の^{こわ}か、^{こわ}それ^{こわ}と^{こわ}も^{こわ}
だ^{こわ}れ^{こわ}も^{こわ}住^{こわ}ん^{こわ}で^{こわ}い^{こわ}ない^{こわ}の^{こわ}か^{こわ}わ^{こわ}か^{こわ}ら^{こわ}ない^{こわ}ほ^{こわ}ど^{こわ}静^{こわ}か^{こわ}で^{こわ}あり^{こわ}ま^{こわ}し^{こわ}た。た^{こわ}ま^{こわ}た^{こわ}ま^{こわ}や^{こわ}せ^{こわ}た^{こわ}犬^{こわ}が、
ど^{こわ}こ^{こわ}か^{こわ}ら^{こわ}き^{こわ}た^{こわ}もの^{こわ}か、^{こわ}ひ^{こわ}よ^{こわ}ろ^{こわ}ひ^{こわ}よ^{こわ}ろ^{こわ}と^{こわ}し^{こわ}た^{こわ}歩^{こわ}み^{こわ}つ^{こわ}き^{こわ}で^{こわ}町^{こわ}の^{こわ}中^{こわ}を^{こわ}う^{こわ}ろ^{こわ}つ^{こわ}い^{こわ}て^{こわ}い^{こわ}る^{こわ}の^{こわ}を^{こわ}見^{こわ}
ま^{こわ}し^{こわ}た。

ケーは、この犬はきっと旅人が連れてきた犬であろう、それがこの町の中で主人を見失って、こうしてうろついているのであろうと思いました。ケーはこうして、この町の中を探検していますうちに、いつともなしに体が疲れてきました。

「ははあ、なんだか疲れて、眠くなってきたぞ。ここで眠っちゃならない。我慢をしないでなくちゃならない。」

と、ケーは独り言をして、自分で気を励ましました。

けれど、それは、ちょうど麻酔薬をかがされたときのように、体がだんだんしびれてきました。そして、もうすこしでもこうしていることができなくなったほど、眠くなってきましたので、ケーはついに我慢がしきれなくなって、そのへいの辺に倒れたまま、前後も忘れて高いいびきをかいて寝入ってしまいました。

よく眠ったと思いますと、だれか自分を揺り起こしているようでありましたから、ケーは驚いて目をみはって起き上がりますと、いつのまにやら日はまったく暮れていて、辺りには青い月の光が冷ややかに彩っていました。

「もう何時ごろだろう、これはしまったことをしてしまった。いくら眠くても、我慢をしないで眠るのではなかったが。」

と、ケーは大いに後悔しました。けれども、もはやしかたがありません。

かれ お じぶん ぼうし ひろ あ
彼は、そこに落ちていた自分の帽子を拾い上げて、それをかぶりしました。

あ た み じぶん ひとり おお ふくろ
そして辺りを見まわしますと、すぐ自分のそばに一人のじいさんが、大きな袋をか
ついで立っていました。

み じぶん ゆ おこ おも
ケーは、このじいさんを見ると、だれか自分を揺り起こしたように思ったが、このじ
いさんであったかと考えましたから、彼は臆する色なく、そのじいさんの方に歩いて
かんが かね おく いろ ほう ある
近づきました。月の光で、よくそのじいさんの姿を見守ると、破れた洋服を着て、古
ちか つき ひかり すがた みまも やぶ ようふく き ふる
くなったぼろぐつをはいていました。もうだいの年とみえて、白いひげが伸びてい
ました。

「あなたはだれですか。」

しょうねん こえ ちから い と
と、少年は声に力を入れて問いました。

ある ほう よ
するとじいさんは、とぼとぼとした歩きつきをして、ケーの方に寄ってきて、
わたし お ある わたし たの わたし ねむ
「私だ、おまえを起こしたのは！ 私はおまえに頼みがある。じつは私がこの眠い
まち た わたし まち ぬし み わたし
町を建てたのだ。私はこの町の主である。けれど、おまえも見るように、私はもうだ
いぶ年を取っている。それで、おまえに頼みがあるのだが、ひとつ私の頼みを聞い
とし と たの わたし たの き
てくれぬか。」

しょうねん はな
と、そのじいさんは、この少年に話しかけました。

たの だんし き
ケーは、こういってじいさんから頼まれれば、男子として聞いてやらぬわけにはゆ
きません。

ぼく ちから
「僕の手でできることなら、なんでもしてあげよう。」

ケーは、このじいさんに誓ちかいました。じいさんは、この少年しょうねんの言葉ことばを聞いて、ひじょうよろこに喜びました。

「やっと私わたしは安心あんしんした。そんならおまえに話はなすとしよう。私わたしは、この世界せかいに昔むかしから住すんでいた人間にんげんである。けれど、どこからか新あたらしい人間にんげんがやってきて、私わたしの領土りょうどをみんな奪うばってしまった。そして私わたしの持もっていた土地とちの上うえに鉄道てつどうを敷しいたり汽船きせんを走はしせたり、電信でんしんをかけたりしている。こうしてゆくと、いつかこの地球ちきゅうの上うえは、一本いっほんの木きも一つの花はなも見みられなくなってしまうだろう。私わたしは昔むかしから美うつくしいこの山やまや、森林しんりんや、花はなの咲さく野原のほらを愛あいする。いまの人間にんげんはすこしの休息きゆうそくもなく、疲つかれということも感かんじなかつたら、またたくまにこの地球ちきゅうの上うえは砂漠さばくとなってしまうのだ。私わたしは疲労ひろうの砂漠さばくから、袋ふくろにその疲労ひろうの砂すなを持もってきた。私わたしは背せ中にその袋ふくろをしょっている。この砂すなをすこしばかり、どんなものの上うえにでも振りかけたなら、そのものは、すぐ腐くされ、さび、もしくは疲つかれてしまう。で、おまえにこの袋ふくろの中なかの砂すなを分わけてやるから、これからこの世界せかいを歩あるくところは、どこにでもすこしずつ、この砂すなをまいっていってほしい。」

と、じいさんは、ケーに頼たのんだのでありました。

少年しょうねんは、じいさんから、不思議ふしぎな頼たのみを受うけて、袋ふくろを持もって、この地球ちきゅうの上うえを歩あるきました。

ある日、彼はアルプス山の中を歩いていますと、いうにいわれぬいい景色のところが
ありました。そこには幾百人の土方や工夫が入っていて、昔からの大木をきり倒
し、みごとな石をダイナマイトで打ち砕いて、その後から鉄道を敷いておりました。そ
こで少年は、袋の中から砂を取り出して、せっかく敷いたレールの上に振りかけまし
た。すると、見るまに白く光っていた鋼鉄のレールは真っ赤にさびたように見えたの
でありました……。

またある繁華な雑踏をきわめた都会をケーが歩いていたときに、むこうから走
ってきた自動車じどうしゃが、危うく殺すばかりに一人のでっち小僧をはねとばして、ふりむき
もせずゆきすぎようとしてしまったから、彼は袋の砂をつかむが早いはやか、車輪しゃりんに投げか
けました。すると見るまに車の運転くま うんてんは止まってしまいました。で、群衆は、この無礼
な自動車じどうしゃを難なく押さえることができました。

またあるとき、ケーは土木工事をしているそばを通りかかると、多くの人足が
疲れて汗を流していました。それを見ると気の毒どくになりましたから、彼は、ごくすこし
ばかりの砂を監督人の体からだにまきかけました。と、監督は、たちまちの間に眠気ねむけをも
よおし、

「さあ、みんなも、ちっと休むだ。」

またあるとき、ケーは土木工事をしているそばを通りかかると、多くの人足が疲れて汗を流していました。それを見ると気の毒になりましたから、彼は、ごくすこしばかりの砂を監督人の体にまきかけました。と、監督は、たちまちの間に眠気をもよおし、

「さあ、みんなも、ちょっと休むだ。」

といって、彼は、そこにある帽子を頭に当てて日の光をさえぎりながら、ぐうぐうと寝こんでしまいました。

ケーは、汽車に乗ったり、また鉄工場にいたりして、この砂をいたるところでまきましたから、とうとう砂はなくなってしまいました。

「この砂がなくなったら、ふたたびこの眠い町に帰ってこい。すると、この国の皇子にしてやる。」と、じいさんのいった言葉を思い出し、少年は、じいさんにあおうと思って、「眠い町」に旅出をしました。

幾日かの後「眠い町」にきました。けれども、いつのまにか昔見たような灰色の建物は跡形もありませんでした。のみならず、そこには大きな建物が並んで、煙が空にみなぎっているばかりでなく、鉄工場からは響きが起こってきて、電線はくもの巣のように張られ、電車は市中を縦横に走っていました。

この有り様を見ると、あまりの驚きに、少年は声をたてることもできず、驚きの眼をみはって、いっしょうけんめいにその光景を見守っていました。

「眠い町」に出てくることばの意味（_____の部分）

ことば	ことばの意味
ふしぎ 不思議	おも 思いもかけないこと。とつぴなこと。
かつき 活気	いきいきとした活動的 <small>かつどうてき</small> な気分 <small>きぶん</small> 。盛 <small>さか</small> んな勢 <small>いきお</small> い。元 <small>げんき</small> 気。
じゃくぜん 寂然	しず 静か <small>しず</small> かでそり <small>しず</small> していること。
けむり 煙	けむり おな もの も よき た 煙と同じ。物 <small>もの</small> が燃 <small>も</small> える時 <small>よき</small> にもやもやと立 <small>た</small> ちのぼるもの。
いくにん 幾人	ひかくてきすく にんずう なんにん 比較的 <small>ひかくてきすく</small> 少ない人数 <small>にんずう</small> 。何人 <small>なんにん</small> 。
じぶん 時分	おおよその時期 <small>じき</small> 、時間 <small>じかん</small> 。ころ
こうきしん 好奇心	めずら 珍しいこと <small>めずら</small> や未知 <small>みち</small> のことなどに興 <small>きょうみ</small> 味 <small>み</small> をもつ心 <small>こころ</small>
ますいやく 麻醉薬	おも いりよう ちりよう かんじや どうぶつ くつう けいげん どうじ きん 主 <small>おも</small> に医療 <small>いりよう</small> で治療 <small>ちりよう</small> などにおける患者 <small>かんじや</small> ・動物 <small>どうぶつ</small> の苦痛 <small>くつう</small> を軽減 <small>けいげん</small> させると同時 <small>どうじ</small> に、筋 <small>きん</small> の緊張 <small>きんちよう</small> を抑 <small>おさえ</small> える目的 <small>もくてき</small> で用 <small>もち</small> いられる。
いびき いびき	すいみんじ こきゅう お ざつおん 睡眠時 <small>すいみんじ</small> の呼吸 <small>こきゅう</small> によって起 <small>お</small> こる雑音 <small>ざつおん</small> のことです
おくいろ 臆する色なく	きおく 気後れ <small>きおく</small> しておどおどする。おじける
どかた 土方や工夫	どうろ こうじ ちすいこうじ けんちく どぼくきぎょういん 道路 <small>どうろ</small> 工事 <small>こうじ</small> や治水 <small>ちすい</small> 工事 <small>こうじ</small> 、建築 <small>けんちく</small> における土木作業員 <small>どぼくきぎょういん</small> のこと 土木 <small>どぼく</small> などの工事 <small>こうじ</small> に従事 <small>じゅうじ</small> する労働者 <small>ろうどうしや</small>
ダイナマイト	ニトログリセリン <small>きざい</small> を基材 <small>きざい</small> とした爆破薬 <small>ぼくはやく</small> 。
はんか 繁华な雑踏	ひと おお あつ 人が多 <small>ひと</small> く集 <small>おお</small> まり、にぎわっていること多数 <small>たすう</small> で込み合 <small>こみあ</small> うこと。人込み <small>ひとごみ</small> 。
でっち でっち小僧	しやくにん しょうにん いえ ほうこう ざつよう じゅうじ しょうねん 職人 <small>しやくにん</small> や商人 <small>しょうにん</small> などの家 <small>いえ</small> に奉公 <small>ほうこう</small> し、雑用 <small>ざつよう</small> に従事 <small>じゅうじ</small> する少年 <small>しょうねん</small>
ぐんしゅう 群衆	むら あつ ひとびと 群 <small>むら</small> がり集 <small>あつ</small> まった人々 <small>ひとびと</small>
にんそく 人足	にもつ うんぱん ふしん ちからしごと じゅうじ ろうどうしや 荷物 <small>にもつ</small> の運搬 <small>うんぱん</small> や普請 <small>ふしん</small> などの力仕事 <small>ちからしごと</small> に従事 <small>じゅうじ</small> する労働者 <small>ろうどうしや</small>

かんとくにん
監督人

ひつよう
必要なときには指示・命令などを出す人

おうじ
皇子

てんのう おこ
天皇の男の子。

天皇陛下御見本

ふたり わか しんし へいたい てっぽう
二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲を
かついで、しろくま いぬ にひき やまおく こ は
かついで、白熊のような犬を二足つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたとこ
を、こんなことを云いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。鳥も獣も一足も居やがらん。なんでも構わ
ないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

しか き よこ ばら にさんぼつ みまい つうかい
「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。
くるくるまわって、それからどたつと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、
どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のような犬が、二足いっしょにめまい
を起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の目蓋を、ちょっと
かえしてみ言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いま
した。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見な
がら云いました。「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻ろうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を拾円も買って
帰ればいい。」

「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか」
ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」「喰べたいもんだなあ」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

そして玄関には RESTAURANT 西洋料理店 WILDCAT HOUSE 山猫軒

という札がでていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか」

「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろいろじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なもんです。

そして硝子の開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、
こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただでご馳走するんだ
ぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その
がらすど うらがわ きんもじ
硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」「ぼくらは両方兼ねてるから」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。
た。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあげようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありまし
た。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。「うん、これはき

っと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからきものの泥を落してください。」と書いてありました。

「これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもって見くびったんだよ」

「作法の厳しい家だ。きっとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互によりそって、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください。」見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは」

二人は帽子とオーバーコートくぎを釘くつにかけ、靴とびらをぬいでぺたぺたあるいて扉なかの中にはいりました。

扉の裏側には、「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気かなけのものはあぶない。ことに尖ったものはあぶないと斯う云うんだらう。」

「そうだらう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだらうか。」

「どうもそうらしい。」「そうだ。きっと。」

二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱちんと錠をかけました。すこし行きますとまた扉があって、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。」

みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

「これはね、外がひじょうに寒いだらう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなところで、案外ぼくらは、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

ふたり つぼ かお め て め くつした あし め
二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。
た。それでもまだ残っていましたが、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふ
りをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、
「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」
と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。
「そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。この
主人はじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、どう
も斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。
「料理はもうすぐできます。
十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。
早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」
そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。
二人はその香水を、頭へぱちやぱちや振りかけました。
ところがその香水は、どうも酢のような匂がするのでした。

「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだろう。」
「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」
二人は扉をあけて中にはいました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。
「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。
もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん
よくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎょっとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。

「どうもおかしいぜ。」

「ぼくもおかしいとおもう。」

「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人
にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことな
んだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」がたがたがたがた、
ふるえだしてもうものが言えませんでした。

「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」がたがたがたがたふるえだして、もうものが言え
ませんでした。

「逃げ……。」がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どう
です、戸はもう一分も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚戸があって、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイ
フの形が切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこっちを
のぞいています。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそこそこんなことを云っています。

「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間拔けたことを書いたもんだ。」

「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けて呉れやしないんだ。」

「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいって来なかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしゃい。いらっしゃい。いらっしゃい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしゃい。」

「へい、いらっしゃい、いらっしゃい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしゃい。」

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

中ではふっふつとわらってまた叫んでいます。

「いらっしゃい、いらっしゃい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしゃい。」

「早くいらっしゃい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っています。」

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声^{こえ}がして、あの白熊^{しろくま}のような犬^{いぬ}が二疋^{にひき}、扉^{とびら}をつきやぶって部屋^{へや}の中に飛び込^{なかとこ}んできました。鍵穴^{かぎあな}の眼玉^{めだま}はたちまちなくなり、犬^{いぬ}どもはうとうな^{へやなか}ってしばらく部屋^{まわ}の中をくるくる廻^{まわ}っていましたが、また一声^{ひとこえ}「わん。」と高く吠^{たかほ}えて、いきなり次^{つぎ}の扉^{とびら}に飛びつ^ときました。戸^とはがたりとひらき、犬^{いぬ}どもは吸^すい込まれるように飛^とんで行^いきました。

その扉^{とびら}の向^{むこ}うのまっくらやみのなかで、

「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」という声^{こえ}がして、それからがさがさ鳴^なりました。部屋^{へや}はけむりのように消^きえ、二人^{ふたり}は寒^{さむ}さにふるふるふるえて、草^{くさ}の中^{なか}に立^たっていました。

見^みると、上着^{うわぎ}や靴^{くつ}や財布^{さいふ}やネクタイピン^{えだ}は、あっちの枝^{えだ}にぶらさがったり、こっちの根^ねもとにちらばったりしています。風^{かぜ}がどうと吹^ふいてきて、草^{くさ}はざわざわ、木^この葉^ははかさかさ、木^きはごんごんと鳴^なりました。

犬^{いぬ}がふうとうな^{もど}って戻^{もど}ってきました。

そしてうしろからは、「旦那^{だんな}あ、旦那^{だんな}あ、」と叫^{さけ}ぶものがあります。

二人^{ふたり}は俄^{にわ}かに元^{げんき}気がついて

「おおい、おおい、ここだぞ、早く^{はや}来^こい。」と叫^{さけ}びました。

簑帽子^{みのぼうし}をかぶった専門^{せんもん}の獵師^{りょうし}が、草^{くさ}をざわざわ分^わけてやってきました。

そこで二人^{ふたり}はやっと安^{あんしん}心^{しん}しました。

そして獵師^{りょうし}のもってきた団子^{だんご}をたべ、途中^{とちゆう}で十円^{じゆうえん}だけ山鳥^{やまどり}を買^かって東京^{とうきよう}に帰^{かえ}りました。

しかし、さっき一ぺん紙^{いっ}くず^{かみ}のようになった二人^{ふたり}の顔^{かお}だけは、東京^{とうきよう}に帰^{かえ}っても、お湯^ゆにはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。

ちゅうもん おお りょうりてん
「注文の多い料理店」にでてくることばの意味 (____の部分)

ことば	ことばの意味
紳士	上品で教養があり礼儀正しい男性
怪しからん	道理にはずれていて、はなはだよくない。不届き。
お見舞いもうす	くれてやれ、くrawしてやれという意味
鉄砲打ち	鉄砲を使って猟をすること。狩猟。
めまい	静止している周囲のものが、いろいろな方向に動くように感じたり、直立の姿勢を保とうとしても、それが困難な状態のこと。
目蓋	目のふた。眼球をおおって開いたり閉じたりする皮膚。
西洋造り	建物を西洋風のつくりにすること。また、その建物。
レストラン	飲食物を供する店、すなわち料理屋や食堂の総称。
瀬戸の煉瓦	愛知県の瀬戸焼といえば陶磁器として有名だが、レンガの産地でもある。良質な土が産出されることから、ここで作られるレンガも優良品。
なんぎ	苦しみ悩むこと。苦勞すること。面倒なこと。迷惑なこと。
大歓迎	たいそう喜んで迎えること。
ご承知	事情などを知ること。また、知っていること。わかっていること
はやってる	商売などがうまくいって繁盛する。人気があること。
見くびった	軽視する。あなどる。見さげる
作法	物事を行う方法。きまったやり方。きまり。起居・動作の正しい法式。
途方もない	道理に合わない。とんでもない。

しじゅう 始終	ここでは、絶え間ないさま。いつも。しょっちゅう
おびかわ 帯皮	革製の帯。ベルト。バンド。
がいう 外套	防寒などのために衣服の上に着るゆったりした外衣。オーバーなど
かんじょう 勘定	ここでは、代金を支払うこと。また、その代金。
じょう 錠	他人に開けられないように、ドア・引き出し・金庫などに取り付け鍵(かぎ)で開閉する装置
きぞく 貴族	身分や家柄の尊い人。また、社会的な特権を世襲している上流階級に属する人。日本では第二次大戦後消滅。
よういしゅうとう 用意周到	用意が行き届いて、手ぬかりがないこと。
こうすい 香水	身体、衣服等につけて香りを楽しむための化粧品。
す 酢	食品に酸味を付与または増強し、味を調べ、清涼感を増すために用いられる液体調味料のひとつ。
げじょ 下女	召使いの女。
きどく 気の毒	他人の不幸や苦痛などに同情して心を痛めること。他人に迷惑をかけて申し訳なく思うこと
いちぶ 一分	ごくわずかであることのとえ。
おやぶん 親分	徒党を組む者のかしら。面倒見がよく親のように頼りになる人。
まぬ 間抜け	おろかなこと。見当はずれなこと。手ぬかりのあること。また、そのさま。
なば 菜っ葉	野菜の葉。また、葉の部分食用とする野菜。
サラダ	日本ではサラダのこと。野菜などに塩、酢、油、香辛料などの調味料をふりかけるか、和えて盛りつけた料理の総称。

フライ おもに魚介類や野菜などの食材に卵白やパン粉をつけて、多量の食用油で揚げた料理。またはその調理法。

ナフキン 食事の際に、油などの飛散による衣服の汚れを防止したり、食後に口の周りを拭いたりするための布。使い捨てのものでは紙や不織布のものもある

にお 俄かに きゆう とつぜん 急に、突然。

みのぼうし 蓑帽子 ゆきふる冬の被り物で、全体が蓑毛(わら、カヤ、スゲ、シナノキなどの植物の茎や皮、葉などを用いてつくってある。)で編まれています。

りようし 猟師 しゆりよう しょくぎよう ひと 狩猟を職業とする人。かりゆうど

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。れども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮した。この妹は、村の或る律気な一牧人を、近々、花婿として迎える事になっていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。先ず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかったのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になって来た。路で逢った若い衆をつかまえて、何かあったのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたって、まちは賑やかであった筈だが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老翁に逢い、こんどはもっと、語勢を強くして質問した。老翁は答えなかった。メロスは両手で老翁のからだをゆすぶって質問を重ねた。老翁は、あたりをはばかり低声で、わずか答えた。

「王様は、人を殺します。」「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心を持っては居りませぬ。」
「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、はじめは王様の妹 婿さまを。それから、御自身のお世継ぎを。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。」

「おどろいた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではごさいませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮しをしている者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。きょうは、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「呆れた王だ。生かして置けぬ。」

メロスは、単純な男であった。買い物を、背負ったままで、のそのそ王城にはいつて行った。たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなってしまった。メロスは、王の前に引き出された。「この短刀で何をするつもりであったか。言え！」暴君ディオニスは静かに、けれども威厳を以て問いつめた。その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたように深かった。

「市を暴君の手から救うのだ。」とメロスは悪びれずに答えた。

「おまえがか？」王は、憫笑した。「仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ。」

「言うな！」とメロスは、いきり立って反駁した。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。王は、民の忠誠をさえ疑って居られる。」

「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着いて眩き、ほっと溜息をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」こんどはメロスが嘲笑した。「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」「だまれ、下賤の者。」王は、さっと顔を挙げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、磔になってから、泣いて詫びたって聞かぬぞ。」

「ああ、王は伶俐だ。自惚れているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。」

いのちご けつ い あし しせん おと
命乞いなど決してしない。ただ、——」と言いかけて、メロスは足もとに視線を落し
しゅんじ わたし なさけ しよけい みっかかん にちげん
瞬時ためらい、「ただ、私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を
あた くだ ひとり いもうと ていしゆ も みっか
与えて下さい。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、
わたし むら けっこんしき あ かなら かせ
私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰って来ます。」

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。「とんでもない嘘を言うわい。逃が
ことり かせ く
した小鳥が帰って来るというのか。」

「そうです。帰って来るのです。」メロスは必死で言い張った。「私は約束を守ります。
わたし みっかかん ゆる くだ いもうと わたし かせ ま
私を、三日間だけ許して下さい。妹が、私の帰りを待っているのだ。そんなに私
しん
を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私
む に ゆうじん ひとじち お ゆ わたし に
の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。私が逃げてしまって、
みっかめ ひぐれ かせ こ ゆうじん し ころ くだ
三日目の日暮まで、ここに帰って来なかったら、あの友人を絞め殺して下さい。たの
む、そうして下さい。」

それを聞いて王は、残酷な気持で、そっとほくそ笑んだ。生意気なことを言うわい。
かせ こ うそ だま ふり はな
どうせ帰って来ないにきまっている。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも
おもしろ みがわり おとこ みっかめ ころ きみ ひと
面白い。そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。人は、これだ
しん かな かせ みがわり おとこ たっけい しょ
から信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。
よ なか しょうじきもの どはい み
世の中の、正直者とかいう奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰って来い。お
みがわり ころ く つみ
くれたら、その身代りを、きっと殺すぞ。ちょっとおくれて来るがいい。おまえの罪は、
えいえん
永遠にゆるしてやろうぞ。」

「なに、何をおっしゃる。」

「はは。いのちが大事だったら、おくれて来い。おまえの心は、わかっているぞ。」
めろす く や じたんだふ い
メロスは口惜しく、地団駄踏んだ。ものも言いたくなくなった。

ちくば とも しんや おうじょう め めんぜん
竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの面前で、
よ とも よ とも にねん あ
佳き友と佳き友は、二年ぶりで逢った。

メロスは、友に一切の事情を語った。セリヌンティウスは無言で頷き、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかった。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、あくる日の午前、陽は既に高く昇って、村人たちは野に出て仕事をはじめていた。メロスの十六の妹も、きょうは兄の代りに羊群の番をしていた。よろめいて歩いて来る兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。そうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでも無い。」メロスは無理に笑おうと努めた。「市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよからう。」

妹は頬をあからめた。

「うれしいか。綺麗な衣裳も買って来た。さあ、これから行って、村の人たちに知らせて来い。結婚式は、あすだと。」

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。眼が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄の季節まで待ってくれ、と答えた。メロスは、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給え、と更に押してたのんだ。婿の牧人も頑強であった。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論をつづけて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すような大雨となった。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも忖え、陽気に歌をうたい、手を打った。

メロスも、満面に喜色を湛え、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入っていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思った。この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願ったが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出発を決意した。あすの日没までには、まだ十分の時間が在る。ちょっと一眠りして、それからすぐに出発しよう、と考えた。その頃には、雨も小降りになっていよう。少しでも永くこの家に愚図愚図とどまっていたかった。メロスほどの男にも、やはり未練の情というものは在る。今宵呆然、歓喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、

「おめでとう。私は疲れてしまったから、ちょっとご免こうむって眠りたい。眼が覚めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくても、もうおまえには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまえの兄の、一ばんきれいなものは、人を疑う事と、それから、嘘をつく事だ。おまえも、それは、知っているね。亭主との間に、どんな秘密でも作ってはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りを持っている。」

花嫁は、夢見心地で頷いた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、

「仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、宝としては、妹と羊だけだ。他に、何も無い。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になったことを誇ってくれ。」

花婿は揉み手して、てれていた。メロスは笑って村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。眼が覚めたのは翌日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、南無三、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。きょうは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。

そうして笑って 礫の台に上ってやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、い
くぶん小降りになっている様子である。身仕度は出来た。さて、メロスは、ぶるんと
両腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出した。

私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。身代りの友を救う為に走るのだ。
王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。走らなければならぬ。そして、私は殺さ
れる。若い時から名譽を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかった。幾度か、
立ちどまりそうになった。えい、えいと大声挙げて自身を叱りながら走った。村を出て、
野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、日は高く昇って、そろ
そろ暑くなって来た。メロスは額の汗をこぶしで払い、ここまで来れば大丈夫、もは
や故郷への未練は無い。妹たちは、きっと佳い夫婦になるだろう。私には、いま、
なんの気がかりも無い筈だ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんな
に急ぐ必要も無い。ゆっくり歩こう、と持ちまえの呑気さを取り返し、好きな小歌をい
い声で歌い出した。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到
達した頃、降って湧いた災難、メロスの足は、はたと、とまった。見よ、前方の川を。
きのうの豪雨で山の水源地は氾濫し、濁流滔々と下流に集り、猛勢一挙に橋を
破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、木端微塵に橋桁を跳ね飛ばしていた。彼は
茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、
繫舟は残らず浪に浚われて影なく、渡守りの姿も見えない。

流れはいよいよ、ふくれ上り、海のようにになっている。メロスは川岸にうずくまり、
男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願した。「ああ、鎮めたまえ、荒れ狂う流
れを！ 時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまわ
ぬうちに、王城に行き着くことが出来なかったら、あの佳い友達が、私のために死
ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく躍り狂う。浪は浪を呑み、捲き、煽り立て、そうして時は、刻一刻と消えて行く。今はメロスも覚悟した。泳ぎ切るより他に無い。ああ、神々も照覧あれ！ 濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ発揮して見せる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の鬭争を開始した。

満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ、めくらめつぼう獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思ったか、ついに憐愍を垂れてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスは馬のように大きな胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切って、ほっとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何をするのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私にはいのちの他には何も無い。その、たった一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り挙げた。メロスはひよいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取って、「気の毒だが正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さっさと走って峠を下った。一気に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かっと照って来て、メロスは幾度となく眩暈を感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、ついに、がくりと膝を折った。立ち上る事が出来ぬのだ。

てん あお な な だ だくりゅう およ き さんぞく さんにん
 天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人
 う たお いだてん とつぱ き しん ゆうしゃ いま
 も撃ち倒し韋駄天、ここまで突破して来たメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、
 つか き うご なさけな あい とも しん
 疲れ切って動けなくなるとは情無い。愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて
 ころ きだい ふしん にんげん おう おも つぼ
 殺されなければならぬ。おまえは、稀代の不信の人間、まさしく王の思う壺だぞ、と
 じぶん しか ぜんしん な いもむし ぜんしん るぼう
 自分を叱ってみるのだが、全身萎えて、もはや芋虫ほども前進かなわぬ。路傍の
 そうげん ね しんたいひろう せいしん とも
 草原にごろりと寝ころがった。身体疲労すれば、精神も共にやられる。もう、どうでも
 ゆうしゃ ふにあ ふてくさ こんじょう ころろ すみ すく わたし
 いいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰った。私は、これ
 どりよく やくそく やぶ ころろ な かみ しょうらん わたし せいいつ
 ほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かった。神も照覧、私は精一ぱい
 つと き うご はし き わたし ふしん と な
 に努めて来たのだ。動けなくなるまで走って来たのだ。私は不信の徒では無い。あ
 こと わたし むね た わ しんく しんぞう め か あい しんじつ
 あ、できる事なら私の胸を截ち割って、真紅の心臓をお目に掛きたい。愛と信実の
 けつえき うご しんぞう み わたし だいじ とぎ
 血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、
 せい ね つ わたし ふこう おとこ わたし わら わたし
 精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きっと笑われる。私の
 いっか わら わたし とも あざむ ちゅうと たお なに
 一家も笑われる。私は友を欺いた。途中で倒れるのは、はじめから何もしないのと
 おな こと わたし さだま うんめい し
 同じ事だ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定った運命なのかも知れない。
 きみ わたし しん わたし きみ あざむ
 セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなか
 わたし ほんとう よ とも とも くら ぎわく くも
 った。私たちは、本当に佳い友と友であったのだ。いちどだって、暗い疑惑の雲を、
 たが むね やど な きみ わたし むしん ま
 お互い胸に宿したことは無かった。いまだって、君は私を無心に待っているだろう。
 ま わたし しん
 ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それ
 おも とも とも あいだ しんじつ よ いち ぼこ たから
 を思えば、たまらない。友と友の間の信実は、この世で一ばん誇るべき宝なのだ
 わたし はし きみ あざむ な
 からな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんも無かった。
 しん わたし いそ いそ き だくりゅう とつぱ さんぞく かこ
 信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲み
 ぬ いっき どうげ か お き わたし で き
 からも、するりと抜けて一気に峠を駈け降りて来たのだ。私だから、出来たのだよ。
 うえ わたし のぞ たま ほう お
 ああ、この上、私に望み給うな。放って置いてくれ。

どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。だらしが無い。笑ってくれ。王は私に、ちよつ
 とおくれて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると
 約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うま
 まになっている。私は、おくれて行くだらう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうし
 て事も無く私を放免するだらう。そうになったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠
 に裏切者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と
 一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、
 ひとりよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き伸びてやろうか。村には私の
 家が在る。羊も居る。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すような事はしないだ
 ろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が
 生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。
 私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬる哉。——四肢を投
 げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

ふと耳に、せんせん、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を呑んで耳を
 すました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の
 裂目から滾々と、何か小さく囁きながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸
 い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬って、一くち飲んだ。ほうと長
 い溜息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労回復と共
 に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を
 守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝
 いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑
 わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。

わたし いのち もんだい し わ き こと い お
私の命などは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言って居られ
ぬ。わたし しんらい むく
私は、信頼に頼いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！ メロス。

わたし しんらい わたし しんらい せんごく あくま ささや
私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれ
ゆめ わる ゆめ わす ごぞう つ わる ゆめ
は夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を
み
見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立っ
はし
て走れるようになったではないか。ありがたい！ 私は、正義の士として死ぬ事が
でき
出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。わたし うま とき
私は生れた時か
しょうじき おとこ しょうじき おとこ し く
ら正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下ださい。

みち ゆ ひと お は くる かぜ はし の ほん しゅえん
路行く人を押しのけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、
えんせき なか か め しゅえん ひと ぎょうてん いぬ け おがわ
その宴席のまただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とばし、小川
と こ すこ しず たいよう じゅうばい はや はし いちだん たびひと さつ
を飛び越え、少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。一団の旅人と颯とすれ
しゅんかん ふきつ かいわ こみみ おとこ はりつけ
ちがった瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も、磔にかか
おとこ おとこ わたし はし
っているよ。」ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走っているのだ。
おとこ し いそ
その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おくれではならぬ。愛と誠の力を、い
まこそ知らせてやるがよい。ふうてい
風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとん
ぜんらたい こきゆう でき に ど さんど ちち ち ふ で み
ど全裸体であった。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はる
むこ ちい し とうろう み とうろう ゆうひ う ひか
か向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っ
ている。

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風と共に聞えた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

あなた ともだち さま で し
「フィロストラスでございます。貴方のお友達セリヌティウス様の弟子でございま
わか いしく あと はし さけ だめ
す。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、駄目でござい
はし くだ かた たす
ます。むだでございます。走るのは、やめて下さい。もう、あの方をお助けになること
でき
は出来ません。」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」

「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。おうらみ申
します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ陽は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕陽ばかりを
見つめていた。走るより他は無い。

「やめて下さい。走るのは、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あ
の方は、あなたを信じて居りました。刑場に引き出されても、平気でいました。王様が、
さんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念を持ちつづ
けている様子でございました。」

「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。間に合う、間に合わぬは
問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きい
ものの為に走っているのだ。ついて来い！ フィロストラトス。」

「ああ、あなたは気が狂ったか。それでは、うんと走るがいい。ひよっとしたら、間に
合わぬものでもない。走るがいい。」

言うにや及ぶ。まだ陽は沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは走った。メロスの
頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひき
ずられて走った。陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えよ
うとした時、メロスは疾風の如く刑場に突入した。間に合った。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って
来た。」と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであったが、喉がつぶれてしわ
がれた声が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。す
でに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に釣り上
げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆を
掻きわけ、掻きわけ、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここに
る！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられ
てゆく友の両足に、齧りついた。

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここに
 いる！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台に昇り、釣り上げられ
 てゆく友の両足に、齧りついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。ゆるせ、と口々に
 わめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。「セリヌンティウス。」メロ
 スは眼に涙を浮べて言った。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で
 一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格
 さえ無いのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で頷き、刑場一ぱいに鳴り響くほど音高
 くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しく微笑み、「メロス、私を殴れ。同じくらい音
 高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生れ
 て、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」
 メロスは腕に唸りをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。「ありがとう、友よ。」二人
 同時に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。
 群衆の中からも、歎歎の声が聞えた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人の
 様子を、まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、こ
 う言った。

「おまえらの望みは叶ったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して
 空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わし
 の願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

どっと群衆の間に、歓声が上がった。「万歳、王様万歳。」

ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、
 気をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、まっぴだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘
 さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」
 勇者は、ひどく赤面した。

はし
「走れメロス」にでてくることばの意味 (_____ の部分)

ことば	ことばの意味
げきど 激怒	はげしく怒ること。
じゃちぼうぎやく 邪知暴虐	悪知恵で荒々しい振る舞いで人を苦しめること。ずるい知恵で乱暴で残虐なこと。 ここでは一国家、一民族、一部族などの最高支配者のことをいう。国などを治める人。
のぞ 除く	とってなくする。取りのける。
けつい 決意	自分の意志をはっきりと決めること。重大なことについて、とるべき行動や態度をはっきりきめること
せいじ 政治	主権者が、領土・人民を治めること
ぼくじん 牧人	牧場で牛馬などの飼育をする男性。
じゃあく 邪悪	心がねじ曲がって悪いこと。また、そのさまやそのもの
ひといちばい 人一倍	普通の人以上であること。人の倍(二倍)。
びんかん 敏感	感覚や感度の鋭いこと。
みめい 未明	まだ夜が明けきらない時分。
じゅうり 十里	江戸時代では、距離を表わす時に使い、一里はおよそ今の4 k m だったので約40 k m となる。
にようぼう 女房	妻のこと。多く、夫が自分の妻をさしている。
うちき 内気	おとなしく、遠慮深い性質。気の弱い性質。
りつぎ 律気	きわめて義理堅い事。実直な事。
はなむこ 花婿	結婚式でこれから婿になる男性、また結婚したばかりの男性。

しゅくえん
祝宴

いわ えんかい
祝いの宴会。

おおじ
大路

はば ひろ どうろ まちなか おお みち おおどお
幅の広い道路。町中の大きな道。大通り。

ちくば とも
竹馬の友

おさな たけうま の あそ とも おさな おさな
幼いころに、ともに竹馬に乗って遊んだ友。幼ともだち。幼なじみ。

いしく
石工

せきざい かこう く いしがき ぞうえい しょくぎや
石材を加工したり組みたてたり、石垣の造営をする職業のこと。

ひさく
久しく

なが あいだ ひと あ ものごと
長い間 その人と会ったり、その物事をする事がなかったさま。

あやしく
怪しく

ぶ き み かん き み わる
不気味な感じがする。気味が悪い。

ふあん
不安

き がかりで お つかないこと。心配なこと。

わか しゅう
若い衆

とし わか おと わかもの
年の若い男。若者。

にぎやか
賑やか

ひと おお あつ かつき
人などが多く集まって活気のあるさま。

ろうや
老爺

とし だんせい こうれい だんせい
年をとった男性。高齢の男性。

ごせい
語勢

はな か ことば いきお ごき
話したり書いたりするときの言葉の勢い。語気。

はばかり
はばかり

き がねする。えんりよ
気がねする。遠慮する。さしひかえる。

あくしん
悪心

わる こと ころ たにん がい くわ ころ
悪い事をしようとする心。他人に害を加えようとする心。

ごじしん
御自身

じしん ていねい い かた あいて み うやま い ひようげん
「自身」の丁寧な言い方。相手の身を敬って言う表現。

よつぎ
お世継ぎ

いっか ちやう たちば つ もの あとつ い とく くんしゅ とうちしや ぎ つ
一家の長の立場を次ぐ者のこと。跡継ぎとも言う。特に君主、統治者の座を継ぐ
子を指す場合が多い。

こうごう
皇后

てんのう こうてい せいさい
天皇・皇帝の正妻。きさき。

けんしん
賢臣

けんめい ゆうのう くんしゅ つか もの けらい
賢明で有能な君主に仕える者(家来)。

らんしん
乱心

ころ みだ くる ぎやくじょう ふんべつ
心が乱れ、狂うこと。逆上したりして分別をなくしてしまうこと。

しん
信ずる

そのことを本当だと思ふ。疑^{うたが}わずに、そうだと思ひ込む。信用^{しんよう}する。

しんか
臣下

くんしゅ つか もの けらい
君主^{くんしゅ}に仕える者^{つか}。家来^{けらい}。

はで
派手

い^{いろ}ど^り・服^{ふく}装^{そう}・行^{こう}動^{どう}など^{など}が華^{はな}やか^{やか}で人^{ひと}目^めをひく^{ひく}・こと。程^{てい}度^どがはな^{はな}はだ^{はだ}しい^{しい}こと。
おおげ^{おおげ}さな^{さな}こと。

ひと
人質

ようきゆうじつげん じしん あんぜん きようほくしゅだん こうそく ひと せきそく とも
要^{よう}求^{きゆう}実^{じつ}現^{げん}や自^じ身^{しん}の安^{あん}全^{ぜん}のた^ため^めに、脅^{きよう}迫^{ほく}手^{しゅ}段^{だん}と^として拘^{こう}束^{そく}し^してお^おく^く人^{ひと}。約^{やく}束^{そく}を^を守^{まも}る
あか^{あか}し^しと^として、ま^また^た経^{けい}済^{さい}上^{じやう}の担^{たん}保^ぽなど^{など}と^として、相^あ手^て方^{がた}に預^{あず}け^けら^られる^る人^{ひと}。

こぼ
拒めば

要^{よう}求^{きゆう}・依^い頼^{ぜん}・働^とき^かけ^けなど^{など}を断^{こと}る。

じゅうじか
十字架

むかし ざいにん じゅうじけい ほん
昔^{むかし}、罪^{ざい}人^{にん}を^をは^はり^りつ^つけ^けに^にし^した^た十^{じゅう}字^じ形^{けい}の^の柱^{はしら}。

たんじゆん
単純

と^とら^らえ^え方^{かた}など^{など}が^が一^{いち}面^{めん}的^{てき}で^で浅^あい^いこと。そ^その^のも^もの^のだ^だけ^けで、ま^まじ^じり^りけ^けが^がな^ない^いこと。

じゆんら
巡邏

みまわ けいかい みまわ
見^み回^{まわ}っ^って^て警^{けい}戒^{かい}す^する^るこ^こと。見^み回^{まわ}り。

けいり
警吏

けいさつかん
警^{けい}察^{さつ}官^{かん}。

かいちゆう
懐中

ふ^ふと^とこ^ころ、ま^また^たは^はポ^ぽケ^けット^との^の中^{なか}

たんけん
短剣

み^みじ^じか^かい^い剣^{けん}。

ぼうくん
暴君

たみ くる ぼうぎやく ひと くる くんしゅ おう さんしやう
民^{たみ}を^を苦^{くる}し^しめ^める^る暴^{ぼう}虐^{ぎやく}(む^むご^ごい^いこ^こと^とを^をし^して^て人^{ひと}を^を苦^{くる}し^しめ^める^るこ^こと)な^な君^{くん}主^{しゅ}(王^{おう}を^を参^{さん}照^{しやう}して^{して}く^くだ^ださい)。

いげん
威厳

ちかよ どうどう
近^{ちか}寄^よりが^がた^たい^いほ^ほど^ど堂^{どう}々^{どう}と^として^{して}お^おご^ごそ^そか^かな^なこ^こと。

そうはく
蒼白

あ^あお^おじ^じろ^ろい^いこ^こと。血^ちの^の気^けが^がな^なく、あ^あお^おざ^ざめ^めて^てい^いる^るこ^こと。

みけん
眉間

まゆ まゆ あいざ ひたい ちゆうおう
眉^{まゆ}と^と眉^{まゆ}と^との^の間^{かん}。額^{ひたい}の^の中^{ちゆうおう}央^{ゆう}。

びんしやう
憫笑

あ^あわ^われ^れん^んで^で笑^{わら}う^うこ^こと。

仕^し方^{かた}が^が無^ない

ど^どう^うす^する^るこ^こと^とも^もで^でき^きな^ない。ほ^ほか^かに^によ^よい^い方^{ほう}法^{ほう}が^がな^ない。

こどく 孤独	なかま みより 仲間や身寄りがなく、ひとりぼっちであること。おもう ことかた ころ かよ あ 思ふことを語ったり、心を通い合 せたりする人が一人もなく寂しいこと。
はんぼく 反駁	たにん しゅちょう ひほん たい ろん かせ はんろん 他人の主張や批判に対して論じ返すこと。反論。
あくどく 悪徳	どうぎ はず げんこう どうとく ほん こうい せいしん 道義に外れた言行。道徳に反する行為または精神。
ちゅうせい 忠誠	ちゅうじつ しょうじき ころ ちゅうぎ つくす 忠実で正直な心。また、忠義を尽くすこと。
せいとう 正当	どうり ただ 道理にかなっていて正しいこと。
こころがま 心構え	こころ なか じゅんび ころ ようい 心の中での準備。心の用意。
しよく 私欲	じぶん ひとり りえき かんが きも 自分一人の利益だけを考える気持ち。
つばや 呟く	ちい こえ い 小さい声でひとりごとを言う。
ためいき 溜息	しんぱい しつぼう かんどう とき おも おお いき 心配・失望・感動などの時に思わずもらす大きな息。
へいわ 平和	せんそう ふんそう なく よ なか じょうたい 戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること。
ちい 地位	しゃかい そしき なか ひと もの し いち みぶん たちば 社会やある組織の中で、人や物の占めている位置。身分や立場など。
ちようしやう 嘲笑	あいて みくだ わら 相手を見下したりばかにしたりした笑い。
げせん 下賤	みぶん ひく う まれ そだ いや 身分の低いこと。生まれや育ちが卑しいこと。
むく 報いる	う こと たい み あ こうい あいて おこな しかえ 受けた事に対して、それに見合う行為を相手に行う。仕返しをする。
はらわた 臓	だいちょう しょうちやう ないぞう そうしやう 大腸・小腸など内臓の総称。
みす 見え透いて	こころ なか み 心の中がよく見える。
ほりつけ 磔	ざいにん は しちゆう ざいにん ほんら しょけい 罪人のからだを張りつけて市中にさらすこと。また、罪人を柱にしぼって処刑す る死刑の一方法。

りこう
伶俐

あたま かこ
頭がよいこと。賢いこと

うぬぼ
自惚れる

じっさいいじょう じぶん おも こ とく
実際以上に自分がすぐれていると思ひ込んで得意になること。

かくご
覚悟

きけん ふり こんなん よそう う ころがま
危険なこと、不利なこと、困難なことを予想してそれを受けとめる心構えをすること。

いのちご
命乞い

ころ いのち たす たのむ
殺されるはずの命が助かるように、頼むこと。

しせん
視線

め む め み ほうこう
目の向き。目で見ている方向。

しゆんじ
瞬時

またたくま ほんのわずかな時間 瞬間

なさけ
情

たにん たい ころ あわ おも かんじょう
他人に対する心づかい。哀れみや思いやりの感情。

しよけい
処刑

けい じっこう とく しけい しょ
刑をす実行すること。特に、死刑に処すること。

にちげん
日限

まえ きじつ かぎ さだ また、その期限の日のこと。

ていしゅ
亭主

いえ しゆじんとか やどや ちやみせ おと
その家の主人特に宿屋・茶店などのあるじ。夫。

しわがれた声
こえ

こえ で じょうたい こえ
声がなめらかに出来ない状態。かすれたような声。

ひっし
必死

ここでは死ぬ かくご ぜんりよく つ
ここでは死ぬ覚悟で全力を尽くすこと。

むに
無二

ただ一つしかないこと。ふた ひとつ
ただ一つしかないこと。二つとないこと。唯一。

ざんぎやく
残虐

ひと い もの たい こうい
人や生き物に対してする行為のむごたらしいこと。

ほくそ笑む
え

うまくいったことに満足して、ひとり ひそかに わら
うまくいったことに満足して、一人ひそかに笑う。

なまいき
生意気

じぶん ねんれい のうりよく かんが で げんどう
自分の年齢や能力を考えず、出すぎた言動をすること。

だま
騙される

きよげん あいて おもわく こうどう
虚言によって相手の思惑どおりに行動するさま。

みがわ
身代り

たにん かわ つと ひと
他人の代わりに務める人。

き み
気味がいい

この おも ひと さいなん しつぱい ゆかい
好ましく思っていない人が災難にあったり失敗したりして愉快である。

たつけい
磔刑

はりつけの けい
はりつけの刑。

しょうじきもの
正直者

ただ
正しくて、うそや 偽りのない人。

ど はい
奴輩

ひとびと いや ことば
人々を卑しんでいう語。やっころ。やつばら。あいつら。きやつら。

えい えん
永遠

ある じょうたい は つづ こと(さま) えいきゅう えいごう
ある状態が果てしなく続く・こと(さま)。永久。永劫。とこしえ。

だい じ
大事

ものごと こんぽん じゅうよう
物事の根本にかかわるような重要なこと。

く や
口惜しい

おも たいせつ うしな ざんねん おも
思うようにいかなかったり大切なものを失ったりして残念に思うさま。また、いまい
ましく思うさま。

じ だん だ ふ
地団駄を踏む

く や おこ はげ ち ふ
悔しがったり怒ったりして、激しく地を踏むこと。

めん ぜん
面前

め まえ ひと まえ み まえ
目の前。人の前。見ている前。

いっ さい
一切

ぜんぶ
全部。すべて。ことごとく。

じ じょう
事情

ものごと じょうたい いた りゆう じょうたい けっか こと しだい
物事がある状態に至るまでの理由や状態。また、その結果。事の次第。

う なず
頷く

しょうだく どうい き も あらわ くび たて ふ
承諾や同意などの気持ちを表すために、首を縦に振る。

な わ う
縄打つ

ざいにん とら しば
罪人などを捕らえて縛ること。

まん てん ほし
満天の星

ほし そら じょうたい
星が空いっぱいにある状態。

いっ すい
一睡

ちよつと ねむ ひと ねむ
ちよつと眠ること。ひと眠り

よう ぐん
羊群

ひつじ
羊のむれ。

ひ ろ う こん ば い
疲労困憊

ひどく つかれて 苦しむ こと。つかれはてる こと。

し つ ち ん
質問

わからない ところ や 疑わしい 点 について 問 いた だ す こと。

ほお
頬

ほっぺた。ほっぺ。

かみ
神

ちようえつ ちから も もの しんこう たいしよう もの にんげん な ちしき
「超越した力を持つ者」「信仰の対象になっている者」「人間には無い知識・
のうりよく そんざい
能力がある存在」。

さいだん
祭壇

かみ れい ぎせい くもつ さいき さいぐ お さいし もち だん
神、霊に犠牲や供物をささげる、また祭器・祭具を置き祭祀に用いる壇。

したく
仕度

じゆんび ようい
準備すること。用意すること。

ぶどう きせつ
葡萄の季節

ぶどう しゆらい ひんしゆなど こと がつ がつころ
葡萄の種類や品種等によって異なるが、おおむね8月から10月頃。

がんきよう
頑強

がんこ ようい くつ
ここでは、頑固で容易に屈しないさま。

しょうだく
承諾

あいて いけん きぼう ようきゆう き う いれ
相手の意見・希望・要求などを聞いて、受け入れること。

ぎろん
議論

たが いけん の ろん あ
互いの意見を述べて論じ合うこと。

しんろうしんぶ
新郎新婦

あたら ふうふ おつと つま
新しく夫婦になった夫と妻。

せんせい
宣誓

ここでは、おお ひと まえ ちか ことば の
ここでは、多くの人の前で誓いの言葉を述べること。また、その言葉

こくうん
黒雲

ころ くも てんき きゆうへん あめ ふ かみなり な おお
黒い雲。天気が急変し雨が降ったり雷が鳴ったりすることが多い。

しゃじく なが
車軸を流す

しゃじく しゃりん しゃりん しんぼう しゃじく てん お
車軸とは、車輪と車輪をつないでいる心棒のこと。この車軸を天から落とすような
ふと あまあし あめ ふ ようす かえ どしゃぶ
太い雨脚の雨がビシバシ降ってくる様子。バケツをひっくり返したような、土砂降
り。

れつせき
列席

せき しゆつせき
その席につらなること。出席すること。

ふきつ
不吉

えんぎ わる おこ きざし
縁起が悪いこと。よくないことが起こりそうな兆しがあること。

こら
恠え

くる た
苦しみなどに、耐えてがまんする。しんぼうする

まんめん きしよく
満面に喜色

よろこ ひようじよう ころろ なか つつ かお であ
喜びの表情が心の中で包みきれず、顔じゅうにあふれ出ているさま

たた
湛える

ひようじよう う かんじよう かお あらわ
ある表情を浮かべる。感情を顔に表す。

みだれ はな
乱れ華やか

い みだ さか いきお さか
入り乱れ、栄えて勢いがあるさま。盛んなさま。

ごうう
豪雨

はげ たりよう あめ おおあめ
激しい多量の雨。大雨。

いっしょう
一生

う し あいだ しゅうせい しょうがい
生まれてから死ぬまでの間。終生。生涯。

むちう
鞭打ち

ここでは、きもちを奮い立たせて頑張ること。

にちぼつ
日没

たいよう じょうたん ちへいせんか しず じこく ひ い
太陽の上端が地平線下に沈むこと。また、その時刻。日の入り。

ぐずぐず
愚図愚図

のろのろといたずらに時間を費やすさま。てきぱき行動しないこと。

みれん じょう
未練の情

てばな あきら き きもち
手離したくない、諦め切れないという気持ち。

こよい
今宵

こんや こんばん
今夜、今晚。

ぼうぜん
呆然

あっけにとられているさま。きぬ
気抜けしてぼんやりしているさま。

かんき よ
歓喜に酔う

おおはろこ ころ そこ ところ きぶん
大喜び、心の底から喜びいい気分になること。

ようじ
用事

しなくてはならないこと柄。ようけん
用件。

やさしい
優しい

たにん たい おも おんわ この かん
他人に対して思いやりがある。穏和で、好ましい感じである。

さびしい
寂しい

ころ みた ものた きもち
心が満たされず、物足りない気持ちである。

ひみつ
秘密

たにん し かく ひと み おし
他人に知られないようにすること。隠して人に見せたり教えたりしないこと。

えら
偉い

ふつう よりもすぐれているさま。にんげん
人間として、りっぱですぐれている。

ほこり
誇り

めいよ かん ころ
名誉に感じること。また、その心。

ゆめみごこち
夢見心地

ゆめ み ころもち
夢を見ているようなぼんやりとした、またうっとりとした心持ち。

もて
揉み手

りょうて からだ まえ あ たの
両手を体の前でこすり合わせること。頼んだり、あやまったり、こびたりするときの
どうさ
動作。

えしやく
会釈

かる れい かわ
軽くあいさつや礼を交わすこと。

えんせき
宴席

さかも せき えんかい せき えんかい
酒盛りの席。宴会の席。宴会。

はくめい ころ
薄明の頃

ひ で まえ ひ い あと そら うすあか とき
日の出のすぐ前、日の入りのすぐ後の、空が薄明るい時のこと。

なむさん
南無三

たいへん
「大変だ」「しまった」などといった意味で使われる言葉です。

だいじょうぶ
大丈夫

たし あんしん
まちがいがなくて確かなさま。あぶなげがなく安心できるさま。

こくげん
刻限

さだ じこく ていこく
定められた時刻。定刻。

しんじつ
信実

いつわ
まじめで偽りがないこと

ゆうゆう
悠々

お っ
ゆったりと落ち着いたさま。

みじたく
身支度

なに み ととの
何かをするために身なりを整えること。みごしらえ。

や ごと
矢の如く

や と はや
矢が飛ぶように早いということ。

かんねいじゃち
奸佞邪智

ころ わるじ え はたら じょうず
心がねじけていて、悪知恵を働かせて上手にこびへつらうこと。

う やぶ
打ち破る

たたいてこわす。うちくだく。

めいよ
名誉

のうりやく こうい ひょうか え
能力や行為について、すぐれた評価を得ていること。

いくど
幾度

どれくらいの回数。いくたび。なんど。

ひたい
額

かお じょうぶ かみ は まゆ あいだ
顔の上部の、髪が生えざわと眉との間の部分。おでこ。

こきょう
故郷

う そだ とち きょうり
生まれ育った土地。ふるさと。郷里。

のんき
呑気

せいかく きぶん
性格や気分がのんびりとしていること。こせこせしないこと。

こうた
小歌

きがる くち みじか つうぞくてき りゆうかうかよう ちい うた ほんかくてき うた
気軽に口ずさめる短い通俗的な流行歌謡。小さな歌、本格的でない歌という
意味。

ぜんりてい
全里程

ぜんぶ きょり
全部の距離のこと。

さいなん
災難

おもいがけず みにふりかかってくる ふこうな できごと
思いがけず身にふりかかってくる不幸な出来事。

すいげんち
水源地

かわなどがながで おおものち
川などが流れ出るおおもの地。

ほんらん
氾濫

かわ みずなどがま いきおで ころずい
川の水などが増して勢いよくあふれ出ること。洪水になること。

だくりゅうとう
濁流滔々

にごった みず はげなが
にごった水が激しく流れ、とどまることなく流れるさま。

かりゆう
下流

ここではかわながをほう。かわしも。また、かわかこうちかぶぶん
ここでは川の流れていく方。かわしも。また、川の河口に近い部分。

もうせいいつきよ
猛勢一挙

はげつよ いきお いっき
激しく強い勢いで一気にということ。

はかい
破壊

やぶれこわれること。やぶりこわすこと。

こつばみじん
木端微塵

こまかくこなぐだち
細かく粉々に碎け散ること。

はしげた
橋桁

きょうきやくうえか わたはした きさきざい
橋脚の上に架け渡して橋板を支える材。

はと飛ばす
跳ね飛ばす

ぶつかって、いきおと飛ばす。はじき飛ばす。

ぼうぜん
茫然

ぼうぜんとしてつかみどころのないさま。ぼうぜんとおなじ。

けいしゅう
繫舟

ふねをつなぎとめること。また、その船。

さら
浚われる

ここではその場にあるものを残らず持ち去られること。

わたしもり
渡守

わた ふね せんどう
渡し舟の船頭。

かわぎし
川岸

かわ りょうがわ せつちかわ
川の両側に接する地。川のほとり。

おとこな
男泣き

おとこはどんなに辛くても泣いてはいけなと言われていたが、だいおとこな男が泣くといいうのは、よほどの事があつた時、むせび泣く状態のこと。

あいがん
哀願

せつねが たのあいて どうじょうしん うった たの
切に願ひ頼むこと。相手の同情心に訴えて頼むこと。

しず
鎮める

ものごと いきおい よわ
物事の 勢いを弱くさせる。

こくこく
刻々

しだい
次第に、その時その時、という意味。

せせら
わら
笑う

ば か
馬鹿にして笑う。あざ笑う。

しょうらん
照覧

あき み
明らかに
見ること。はっきりと見ること。ここでは、神仏が御覧になること。

はつき
發揮

のうりよく とくせい
もっている能力や特性などを十分に働かせること

だいじゃ
大蛇

おお へび
きわめて大きな蛇のこと。

とうそう
闘争

あいて か
相手に勝とうとして争うこと。ここでは荒れ狂う浪と争う。

まんしん
ちから
満身の力

ぜんしん
からだじゅうの、全身の力。

うずま
渦巻く

みず うず
水などが渦になって動く。

ししふんじん
獅子奮迅

しし ふる た もうぜん つき すす
獅子が奮い立ち猛然と突き進むことから、物事に勢いよく対処するさまや、強い
いきご
意気込みを言う。

れんびん
憐愍

おも
かわいそうに思うこと。あわれむこと。あわれみ。

どうぶる
胴震い

さむ おそ こうふん
寒さや恐れ・興奮などのために全身がふるえること。

とつぜん
突然

よ き
予期しないことが急に起こるさま。だしぬけであるさま。

いったい
さんぞく
一隊の山賊

もくてき きょうゆう しゅうだん
目的を共有した集団が、山中において旅人などの通行人から財物を奪い取る
ごうとう
強盗、またその集団。

いっせい
一斉

どうじ
同時にそろって何かをすること。同時。

こんぼう
棍棒

ひと にぎ ふ うご
人が握り振り動かすのに適度な太さと長さを備えた丸い棒のこと。

ひちょう
飛鳥

そら と とり
空を飛ぶ鳥のこと。

せいぎ
正義

ひと みち
人の道にかなっていて正しいこと。

もうぜんいちげき
猛然一撃

いきお はげ いっかい だげき こうげき くわ
勢いが激しく、1回の打撃または攻撃を加えること。ひとつち。

ひるむ

おじけづいてしりごみする。気おくれする。

いっき
一気に

とちゆう やす ものごとなど
途中で休まずに物事等をするさま。いっぺんに。

さすが
流石

すっかり感心すること。

しゃくねつ
灼熱

や あつ
焼けつくように熱いこと。

めまい
眩暈

せいし しゅうい ほうこう うご かん ちよくりつ しせい
静止している周囲のものが、いろいろな方向に動くように感じたり、直立の姿勢を
保とうとしても、それが困難な状態のこと。

ひざ お
膝を折る

ひざ お ま からだ
膝を折り曲げて、体をかがめること。

いだてん
韋駄天

あし はや ひと
足の速い人のこと。

きだい
稀代

よ
世にまれなこと。めったにないこと。また、そのさま。

ふしん
不信

しん しんよう
信じないこと。信用できないこと。

おも つぼ
思う壺

ねら どお
たくらんだとおりに。狙い通りになること。

な
萎えて

ちから ぬ じゆう
力が抜けて自由がきかなくなること。

ろぼう
路傍

みち
道のほどり。みちばた。

ふにあい
不似合

にあ
似合わないこと。ふさわしくないこと。

ふてく
不貞腐れる

ふへい ふまん きもち たいど はんこうてき たいど
不平・不満の気持ちがあつて、なげやりな態度や反抗的な態度をする。

すく
巢食う

わる かんが びようき やど
ここでは、悪い考えや病気などが宿る。

あざむ
欺く

あいて しんらい
相手を信頼させておいてだます。

うんめい
運命

いっばん にんげん あた のが い み
一般に人間に与えられた逃れることのできないさだめを意味することば。

ぎわく 疑惑	ほんとう ふせい うたが 本当かどうか、不正があるのではないかなどと疑いをもつこと。また、その気持ち。疑い
むしん 無心	いっさい もうねん はな ころ 一切の妄念を離れた心。
みみう 耳打ち	あいて みみ くち よ 相手の耳もとへ口を寄せてささやくこと。
みがわ 身代り	ほんにん か ここでは、本人の代わりに。
ひれつ 卑劣	ひんせい げんどう 品性や言動がいやしいこと。
ひとり 合点	じぶん 自分だけで、よくわかったつもりになること。
ほうめん 放免	こうそく と じゆう からだの拘束を解いて自由にすること。
うらぎりもの 裏切者	みかた す てきがた やくそく しんぎ きたい そむ ひと 味方を捨てて敵方についたり、約束・信義・期待に背いたりする人。
ふめいよ 不名誉	めいよ きず 名誉を傷つけること。そのさま。
じんしゆ 人種	ひと しゃかいてきち い せいかつしゅうかん しょくぎょう きしつ ぶんるい ここでは、人をその社会的地位・生活習慣・職業や気質などによって分類して いいうい方。
あくとくしゃ 悪徳者	どうぎ はず げんこう どうとく ほん こうい せいしん ひと 道義に外れた言行。道徳に反する行為または精神の人。
じょうほう 定法	ばあい き かた おおやけ き こういう場合にはこうするものと、決まっているやり方。また、公に決まっている 規則。
やんぬる哉 やんぬる哉	いま 今となつては、どうしようもない。
しし 四肢	りょうて りょうあし てあし どうぶつ しほん あし 両手と両足。手足。また、動物の四本の足。
まどろう まどろう	すこ あいだ 少しの間うとうとする。
せんせん せんせん	みず なが 水がさらさらと流れるさま。
あたま 頭をもたげる	よこ しせい あたま ここでは、横になっていた姿勢から頭をあげる。

こんこん
滾々と

みず で
水などがわき出てつきないさま。

かいふく
恢復

いちどわる じょうたい もと じょうたい かいふく
一度悪い状態になったものが、元の状態になること。回復とも。

ぎむすいこう
義務遂行

とうぜん
当然しなければならないことをやる遂げること。

しゃよう
斜陽

にし かたむ たいよう
ここでは、西に傾いた太陽。

きたい
期待

じつげん のぞ ま う あ ころま
あることが実現するだろうと望みをかけて待ち受けること。当てにして心待ちにすること。

わ
お詫び

あやま しゃがい
謝ること。謝罪すること。

ささや
囁き

おと
ささやくような、かすかな音。

五臓

じんたい いつ ないぞう しんぞう かんぞう はいぞう ひぞう じんぞう
人体の五つの内臓。心臓・肝臓・肺臓・脾臓・腎臓。

しゅえん
酒宴

ひとびと あつ さけ く か たの かい さかも えんかい
人々が集まり酒を酌み交わして楽しむ会。酒盛り。宴会。

ぎやうてん
仰天

てん あお おどろ い
(天を仰ぐほど驚く意) ひどくびっくりすること。

いちだん
一団

ひと あつ いちぐん
一つの集まり。一群。ひとかたまり。

ふきつ
不吉

えんぎ わる ふうん きざ
縁起が悪いこと。不運の兆しがあること。

こみみ
小耳

みみ
ちよつと耳にすること。ちらりと聞くこと。

ふうてい
風態

みぶん しょくぎやう がいけんじやう み
身分や職業をうかがわせるような外見上のようす。身なり。

ぜんらたい
全裸体

み いしやう つ
身に衣類を着けていないこと。

とうろう
塔楼

たか たてもん とうじやう かたち たてもん
高くそびえる建物。また塔状の形をした建物。

しけい
死刑

じゅけいしや せいめい うば けいばつ
受刑者の生命を奪う刑罰。

うらむ

しやう あいて にく おも きもち のぞみ
ひどい仕打ちをした相手を憎く思う気持ちをもちつつける。望みどおりにならず、残念に思う。

むね は さ
胸が張り裂ける
おも
思い

かな ざんねん ころも
どうしようもなく悲しく残念な心持ち。

けいじょう
刑場

しけい しつこう ぼしよ
死刑を執行する場所。

へいき
平気

こころ どうよう お つ
心に動揺がないこと。落ち着いていること。

しんねん
信念

ただ しん じぶん かんが
正しいと信じる自分の考え。

き くる
気が狂う

せいしんじょうたい いじょう せいしつ じょうたい つうじょう おお はず
精神状態が異常になるさま。性質や状態が通常それから大きく外れること。

いうにや及ぶ

い言うまでも無い。ざわざいひつようがあるだろうか。

しりよく
死力

し かくご だ ちから ちから ひっし ちから
死んでもいいという覚悟で出す力。ありったけの力。必死の力。

ちへいせん
地平線

だいち そら せつ み めん
大地が空と接している(ように見える)面のことをいいます。

いっぺん ざんこう
一片の残光

ゆうひ しず さいご すこ ひかり
夕日が沈むぎりぎりの最後の少しの光。

しっふう
疾風

きゆう はげ ふ かぜ
急に激しく吹く風。

ぐんしゅう
群衆

むら あつ ひとびと
群がり集まった人々。

かす
幽かに

やっかん と ていど みと
やっと感じ取れる程度であるさま。はっきりとは認められないさま。

かじ
齧りつく

しっかきくっついて離れまいとする。しがみつく。

なぐ
殴る

こぶし ぼう あいて らんぼう つよ う
こぶしや棒などで相手を乱暴に強く打つ。

ほうよう
抱擁

しんあい じょう
親愛の情をもって、だきかかえること。

しかく
資格

あることを 行うために必要とされる条件。

さつ
察する

ものごと じじょう し
物事の事情などをおしはかってそれと知る。

ほほえ
微笑み

にっこりと笑うこと。また、その笑い。

うな
唸り

ちから い くる なが ひ ひく こえ だ
力を入れたり苦しんだりするときに、長く引いた低い声を出す。うめく。

きよき
歔歔

すすり 泣く こと。むせび 泣き。

はいご
背後

うし せなか ほう こうほう
後ろ。背中の方。後方。

かな
叶う

おも じつげん ねが
思いどおりに実現する。願っていたことがそのとおりになる。

くうきよ
空虚

ないぶ なに
内部に何もないこと。また、そのさま。から。むなしいこと。

もうそう
妄想

こんきよ そうぞう
根拠もなくあれこれと想像すること。またその想像。

かんせい
歓声

よろこ おき さけ こえ かんこ こえ
喜びを抑えきれずに叫ぶ声。歓呼の声。

ばんざい
万歳

よろこ いわ あらわ どうさ き ことば どうさ あらわ ばあい ばんざい
喜びや祝いを表す動作などを指している言葉。動作を表す場合は、「万歳」の
ことば はつ いせい りょうて あ
語を発しつつ、威勢よく両手を上げる。

ひ
緋

あざ あかい
鮮やかな赤色。

ささ
捧げる

りょうて も め たか うえ めうえ ひと もの だ
両手に持って目の高さより上にあげる。目上の人などに物をさし出す。たてまつ
る。献上する。

かわい
可愛い

むじやき にく ことば ちい
無邪気で、憎めない。すれてなく、子供っぽい。小さいもの、
よわ ころひ きもち
弱いものなどに心引かれる気持ちをいadakさま。

くや
口惜しい

おも たいせつ うしな ざんねん おも きま
思うようにいかなかったり大切なものを失ったりして残念に思う様。

せきめん
赤面

かんじよう かお あらわ あか
感情が顔に表れて赤くなること。

原文の中で、読みにくいと思われるところを一部変更しています。

作品名	ページ	原 文	変更後
五十音 牛	6	大角豆（ささげ）	ささげ
	16	闘牛士（トリアドル）	闘牛士（とうぎゅうし）
蜘蛛の糸	33	鍵陀多（かんだた）	カンダタ
	34	暗（やみ）	闇（やみ）
	36	断れる（きれる）	切れる（きれる）
	37	尋いて（きいて）	訊いて（きいて）
	38	午（ひる）	昼（ひる）
眠い町	43	寂然（しん）	寂然（じゃくぜん）
	44	己（おれ）	俺（おれ）
	45	四辺（あたり）	辺り（あたり）
	47	休息（やすみ）	休息（きゅうそく）
	48	雑沓（ざっとう）	雑踏（ざっとう）
注文の 多い料理店	52	眼ぶた（まぶた）	目蓋（まぶた）
	54	扉（と）	扉（とびら）
	58	遁げ（にげ）	逃げ（にげ）
		一枚扉（いちもつとまいと）	一枚戸（いちまいど）
	60	室（へや）	部屋（へや）
走れメロス	64	お世嗣（およつぎ）	お世継ぎ（およつぎ）
	66	嘎（しわ）がれた	しわがれた
		北叟笑（ほくそえ）んだ	ほくそ笑んだ
		奴輩（やつばら）	奴輩（どはい）
		相逢うた	逢った
	67	首背く（うなずく）	頷く（うなずく）
		手を拍った（うった）	手を打った（うった）
	69	木葉微塵（こっぱみじん）	木端微塵（こっぱみじん）
72	潺々（せんせん）	せんせん	

タッチタイプ応用

2017年10月1日 初版

本書の複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作権者の権利侵害になります。

連絡先

(株)日本ビーコム

☎520-0802

滋賀県大津市馬場3-2-25 ワカヤマビル 2F

Tel 077-527-5681 Fax 077-527-5687



- Microsoft、Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標です。
- その他、記載されている会社名、製品名は、各社の商標および登録商標です。
- テキストに記載されている内容、仕様は予告なしに変更されることがあります。